325
385

伏明諸録

始

宮內廳書陵部

伏明語録

大正
4. 12. 18
内交

伏明師にある人が肖像なれ描かせになつては如何であるかと勧めた時、師はその所持せる松花堂の自畫像を示して、「自分はこの松花堂によく似てゐる。若し自分が見たければ、この松花堂の肖像を見るがよい」と言つて肖像を描かすことを好まれなかつた。それが爲め茲に松花堂の肖像を掲げて師の風貌を偲ぶよすがとしたのである

師の目錄に次の一節がある。これも師と松花堂との精神的交渉を知ることが出來るから茲に書き加へることゝした。

九月六日壁上昨徹丈山書軸而
掛松花堂自畫像自賛和歌曰

ねさめして我曉を松の戸に
むとせれ風の色をきかなん

而今以眞宗意和之曰

ねさめして我曉を松の戸に
むとづる風は彌陀の呼聲

に月の

日（7月）昭和二年（紫宗）夏に今回

人なかりの屋の命かを

に月の

曰郷和費自繪一

曰一輪書山水、北上繪師

だんしゃっぷるこ、べるこ

が藤交的輔輔の茶荘繪の輪を繪を

るあのたしてもがゃもしたの盤屋の繪の荘茶繪

繪がた。ゆたのがをかるこ、ゃもが繪の

見を繪貫の荘茶繪の、繪のがたれ見を自分を貫し自。繪を

荘繪のこは分自」、ん（を荘繪自の荘茶の

ゃ繪を、るあ人な繪貫を繪はんつなにに輪田分

序

竹中慧照學師は滋賀縣彦根法緣寺に生れ、明治四十五年七月まで東京に留學して眞宗大學を卒業せられ、今は鹿兒嶋に在りて布教に從事せらる、其津梁の餘暇を以て、同國の先輩たりし日野伏明師の語錄を編輯せられ、刊行の日近きに在りと聞く、隨喜の至りに堪へざるなり。伏明師の學德は余の稔聞する所にして、其法語の余を感ぜしめしもの頗る多し、中に就て左の一則の如きは、前田慧雲博士も、曾て之を其著なる眞宗

道徳新編に掲載せられ、又某氏の先徳芳談にも之を編次せり、其書には師を以て慧劍の門人とせり。其語に曰く。

先き遠く用心する程すぐれたるはなし。一日の用意するものは、一月過ごす内に困ることあり、一月の用意するものは、一年の内に困ることあり、一年の用意するものは、一生の内に困ることあり。一生の用意あれば、一年の用意は自ら出來、一年の用意あれば、一月のくらしに事を缺くことなし、一月の用意すれば、一日の暮し

に障りあることなし。これによりて一生の用意ばかりをして居らば、後生の事に障りあるべし、後生の用意をし、信を獲て、能く王法を守らば、一生の事にさし障りなかるべし。

善いかな斯語、余の斯語を紹介する毎に、聞く者未だ曾て滿足せざるはあらず、是れ孟子の謂ふ所、言近くして指遠き者は善言なりと云ふものなればなり、其一斑已に此の如し、今此語錄に由りて其全豹を見ることを得ば、讀者の喜び知るべきなり。余曾て聞

く、伏明師は終身寮司に止まりて擬講轉進等の事を希望せずと、其志の高尚にして、虚名を好まず、學を修め德を積み、訓育の諄々たりしことは、後生をして慚死せしむるの概ありと。此錄を讀む者、先づ其人を知らずして可ならんや。照公友人に托して余に序を需めらる、余は長野縣に趣くの途次、今東京に在り、乃ち直ちに筆を執りて此序を作り以て其責を塞ぐ。

大正四年乙卯十一月二十四日東京城西
爪雪處に在りて　南條文雄識す

例言

一　この『語錄』は伏明老師の日錄や手控や其他種々の遺書の中から法味津々たるものゝみを摺ひ輯めたものゝみで言文々體等はなるべく遺書のまゝにして置きました。これ老師の一言一句をも誤り傳へんことを恐れたからであります。

一　茲に本書を『語錄』と名けたが、語錄の語は或は妥當を得てをらぬかも知れぬ。或は隨錄とも言行錄とも名ければ名け得らるゝが今は內容の大部分を現はす爲めに『語錄』と名くることゝ致しました。

一　口繪の解說にも一言して置ひた通り、本書の卷頭に伏明師の肖像を掲げて師の風貌を偲びたいと思ひましたが、これは反つて師の本懷ではあるまいと思つて松花堂の肖像を掲げ、以て師の風貌を

伏明語錄

目次

一　例言……一
一　身心の修養……一
二　理屈知らひでも……一
三　南無阿彌陀佛は丸藥……三
四　善根積み難し……三
五　道は邇きにあり……四
六　我慢の角はよし折らずとも……四
七　人生行路難……五
八　罪惡は如來にまかせよ……七
九　淨玻璃鏡上の我等……八
一〇　睡眠煩惱……九

偲ぶよすがと致しました。

一　一言一節の初めに付した目示は編者が讀者諸君の便宜の爲めに付したものであります。唯老師の眞意を誤まるなきやを恐る。

一　この『語錄』を編するに當り野田現淨師が種々の便宜を與へて下さつたことを茲に御禮申します。

大正四年十一月　　九州にて　竹中慧照

一一　亂世の難を知りて治世の恩を知る……一〇
一二　論主の一心……一一
一三　天が地となり地が天となるとも……一一
一四　竹の贊……一三
一五　遇善知識の喜……一三
一六　生々世々の因緣……一四
一七　一度の違ひが一期の違ひ……一五
一八　客に松茸佛には菊……一六
一九　『心を一つにして』とは……一六
二〇　善知識は我等の仲人……一七
二一　和讃のこゝろを……一九
二二　至心廻向と至心信樂……一九
二三　本橋と假橋……二〇
二四　信心の切手……二一
二五　まひらせごゝろわろし……二二
二六　三品の懺悔……二三

二七　我等は地獄の正客なり、極樂の正客なり……二五
二八　この世の火事、こゝろの火事……二六
二九　扇に書き與へられたる歌……三〇
三〇　狂歌三首……三一
三一　帶一本から身代限りする……三二
三二　三經一口辨……三四
三三　顏の美しきと醜きと……三四
三四　六十年來咬菜根……三六
三五　過去のわが姿……三七
三六　甘酒進上……三八
三七　疑一つが……三八
三八　雜修の人と專修の人……三九
三九　うた四首……四〇
四〇　苦樂は表裏……四一
四一　障多きに德多し……四一
四二　慾の狐……四一

四三 御名の乳房より……四四
四四 誠の約束……四四
四五 我家の障子の破れから……四五
四六 嫁の不足は姑の不足……四七
四七 解信と仰信……四七
四八 人心と道心……四九
四九 茶山の詩と千代女の俳句……四九
五〇 安樂庵の歌に和して……五〇
五一 千代女の句に和して……五一
五二 狂歌六首……五三
五三 座敷の芥……五四
五四 同行の問に答へて……五五
五五 王法と國恩……五六
五六 席上茶話……五七
五七 遠水不救近火……五八
五八 ものごとの苦になる時……五八

五九 問答三則……六二
六〇 三毒の起る心を……六二
六一 善き夢見んと思ふとも……六三
六二 自力の行……六三
六三 信者と未信者の行き先……六四
六四 三井の鐘……六四
六五 蠅……六五
六六 機なげき心……六五
六七 行卷願名……六六
六八 治兵衛曰く……六七
六九 禍福はかり難し……六八
七〇 智者の幸は愚者の不幸なり……六八
七一 三重の悔……六九
七二 大福長者と貧亡人……六九
七三 女の紺足袋、武士の無腰……六九
七四 下女には大根の皮むきが相應なり……七〇

七五 嫁せんとする我が娘を誡むる條々……七一
七六 病中吟……七四
七七 聖道の難を知りて淨土の易を喜べ……七六
七八 則我善親友……七六
七九 着物きたまゝ……七八
八〇 求めず、されど與へられたり……七九
八一 よく眠る同行に……八〇
八二 他力と邪見……八一
八三 我慢の心を曲げるには……八二
八四 女は諸佛と角力とつて勝つた者……八三
八五 信火行煙……八五
八六 久方の月のなかなる……八五
八七 水鼻の歌……八六
八八 太陽の前の星の光……八七
八九 一日の用意と後生の用意……八七
九〇 臨……八八

九一 處世二十一要法……八九
九二 舍利弗の本生譚……九一
九三 砂糖にまるめて……九二
九四 鴛鴦と鹿は出家の手引……九三
九五 三經の大綱……九五
九六 信心の人にまぎれて……九六
九七 ふた通りの賴み……九七
九八 念佛を主人とせよ……九八
九九 金なくて何の己れが櫻かな……九八
一〇〇 祭まつ間に……九八
一〇一 焦熱地獄……九九
一〇二 やがて淨土にて……九九
一〇三 易行の水道……九九
一〇四 處世の要訣……一〇〇
一〇五 三經大意……一〇二
一〇六 人性論……一〇三

一〇七　親は極道息子程可愛い……一〇四
一〇八　凡夫の心と如來の心……一〇五
一〇九　虚僞の信、眞實の信……一〇八
一一〇　閻魔の前にて……一〇七
一一一　瓢の繪に題して……一〇七
一一二　御恩報謝……一〇八
一一三　願力とは……一〇九
一一四　向ふが出來ても……一一〇
一一五　信心の人にまぎれて……一一〇
一一六　わが子に許さゝるこゝも……一一一
一一七　月を見て讀める……一一一
一一八　讀書の樂……一一一
一一九　齒が拔けた故合はぬなり……一一三
一二〇　報謝の御緣……一一三
一二一　罪といふ見出しにて……一一三
一二二　惡魔退散の念佛にあらず……一一五

一二三　『ありそうでなきもの』と『なさそうであるもの』……一一五
一二四　金子拾ふ福分をなき者を……一一六
一二五　火の車……一一八
一二六　靈魂不滅……一一九
一二七　蓮師の和歌を批難する者に……一二〇
一二八　忘れ草……一二〇
一二九　人の爲めを思ひてなせる行爲は……一二一
一三〇　人の一生……一二一
一三一　往還廻向は往復切符……一二三
一三二　無碍の一道……一二三
一三三　汝に出づるものは汝に返る……一二三
一三四　終身天命の原因五つ……一二四
一三五　如何に地獄へ落ちんと思ふとも……一二五
一三六　名利の挿箱講釋法話の兩がけ……一二六
一三七　放鼠吟……一二六
一三八　地獄、餓鬼、畜生……一二八

一三九　佛猶大盜……一三九
一四〇　『あさからぬ』の五字……一三〇
一四一　御恩報謝……一三一
一四二　紀の國屋亦右衛門の辭世……一三二
一四三　聽聞の仕方……一三三
一四四　虫の聲……一三五
一四五　夜開戸雪白……一三五
一四六　異見する時と、せらるゝ時と……一三六
一四七　心を紙袋に入れよ……一三六
一四八　御名は我等が往生の證據なり……一三七
一四九　我は路に落ちたる金を拾ひ得ぬ者なり……一三九
一五〇　何事も報謝と存ずべきなり……一四〇
一五一　慰細君……一四一
一五二　他力念佛は上白米なり……一四二
一五三　虛假不實の我身……一四二
一五四　『南無』とは衆生の阿彌陀佛を一心一向に賴み奉るこゝろなり……一四三

一五五　望庭老櫻花飛……一四四
一五六　萬行圓備の嘉號……一四四
一五七　老牛呰犢の愛心……一四五
一五八　松影の暗きは月の光かな……一四六
一五九　恩愛はなはだ絶ち難し……一四七
一六〇　念佛には獨り立ちをさせよ……一四七
一六一　二河白道の圖賛……一五〇
一六二　彌陀の本願濁世に盛んなる理由……一五一
一六三　裸體を羨むべからず……一五二
一六四　『御一代聞書』懈怠章……一五四
一六五　凡夫の嗜みは間にあはぬ……一五四
一六六　機の深信で味をつけよ……一五五
一六七　狼に逐はれて……一五五
一六八　信の弊は邪見……一五六
一六九　元日法語……一五六
一七〇　新年法話……一五七

一七一　正月の歌……一五八
一七二　新年試筆……一五九
一七三　維摩一默……一六〇
一七四　大晦日法語……一六〇
一七五　除夜吟……一六一
一七六　詠草集……一六二
一七七　初聞鶯數聲……一六九
一七八　餘寒……一七〇
一七九　春寒……一七一
一八〇　無題歌……一七一

附錄

一　伏明老師のことゞも

以上

伏明老師のことゞも

一

伏明老師は嘗て擬講の稱號を授與するとの內示のあつた時

思ひきや七十の屁をこき(古稀)すぎた老僧に
講者の尻をかぎに出よとは

といふ一首の狂歌を詠じて笑つて受けなかつたことによつて有名な方であつて、又道心堅固、飄逸洒落の老翁として、その名が高かつた。

肩書から言つても唯ほんの寮司で一代を終つたのみであり、經歷から言つても、いつも自坊に引つ込んで講義をして居られ

て、餘り學寮へは顔出しせず、唯一度嘉永二年の夏講に雲華院大含師が『大無量壽經』の講釋をせられた時、其副講として『妄盡還源觀』を講釋せられた位のものであつて餘りその時分の公會の席上へは顔出しせられなかつたので一般には廣く名聲が知られなかつたやうであるが、その自坊である江州の日野の寮舍には師の德風を慕ひ、又師の講筵に列すべく馳せ集つた者が常に六七十の數を絶たなかつたといふのを見ても師の德望が如何に高かつたか、又その蘊蓄が如何に深かつたかを知ることが出來る。

二

師は諱を證圓、伏明はその字である。自珍或は賣松翁、或は賣松子と號して居られた。寛政四年壬子正月二日、江州蒲生郡日野町願證寺の奥まつた一室に呱々の聲を擧げた。幼にして彦根侯の儒臣某士につきて經書を學び、長じて如說院慧劍嗣講を師として專ら內典を研究せられた。爾來京都に上つて六條溝口屋に寓して當時の碩德雲華院師を初め、その他の講者に師事して夙夜覃思研鑽、寢食を廢すること數年であつた。

後、當時その名高かつた經歷和尙を師とし、又高野山に華嚴の巨匠宣然房明道に就きて專ら華嚴の蘊奧を極めた。後に華嚴學に重きをなすに至つたのはこれが爲めである。この間に於

ていかに文字通りに寢食を忘れて研鑽に、いそしまれたかは次の逸話によりて知ることが出來る。

嘗て鄉里の母親から師の元へ一個の枕を送り屆けて來たことがあつた。無論、師はこの親心の籠つた母親からの送物には心中泣かれたに相違ない。所が師は『これ我が修學を妨ぐるの惡魔である』と言つて

汝雖二小物一巨レ容レ房　恒伴二睡魔一能作レ妨
今朝使下向二東方一去上　勿下再慕レ吾入中洛陽上

といふ一詩を賦して直ちに鄉里に送り返へしたといふことである。時に師實に十八歳の一青年僧であつた。當時、師が假寓

して居つた溝口屋主人の直話によると、師は大へん酒を嗜まれたといふ。いつも、なみ〳〵と充ちた寒德利を天井から細ひ麻紐で闇燈の燈の上へ釣るして置ひて、その下で夏の暑い夕も冬の寒い晨も、一生懸命勉强して居られた。そして闇燈の上に釣るした寒德利から湯氣が立ち上つて酒が温る頃になると、師は勞れた頭を一杯の甘露水によつて慰めては又書籍を繙ひて居られて、寒德利が空しくなつた頃に机の端にころりと横になつて寢入つてしまはれたそうである。そして師が帶を解き衣物を脱ひて寢られたことがなかつたといふ。

三

師は、自坊の境内の西北隅に八疊四間のさゝやかな寮舍を建てゝ根力社と號し、茲で集まつて來る者の爲めに宗乘を始め華嚴などの餘乘、さては經書に至るまでも熱心に講義をして居られた初めの間は、さうでもなかつたが段々年が過つた從つて、その名を聞き傳へて來り會座に列なるものが增して、詩會文會までも盛んに開かれるやうになつた。それが爲め根力社に集る者は單に僧侶のみならず文人墨客來り會するといつた有樣で、俗人の子弟も又集つて來て盛んなものであつた。今日現存している門侶帳には三百餘名の名が列せられてあるのを見ても其盛況が想像せられる。松山の了英、神守空觀、安部大圓、寛大行、福

田覺城、瑕丘宗興(本願寺派勸學)雲州見勵、江戸の道英、大和の法嚴等、孰れも在學十年以上の師の上足であつた。

今から六七十年前、日野の町から近在へかけて毎日のやうに禪堂の雲水のやうな服裝をした青年僧侶の一隊が手に〳〵鐵鉢を持つて『願證寺所化』と高聲に呼びながら練り歩ひたのを見たであらう。これらの所化は、かういふ風にして生活の資糧を獲ながら、質素な雲水生活に甘んじて、多くは本堂の片隅、寮舍の一隅に机を列べて師の薫育を受け指導を仰ひだものである。中にも後世に傳ふべき美談として有名なのは後年本願寺派の勸學になつた瑕丘宗興師の如きは、この托鉢によりて、年老ひた

母親を養ひながら師の講義を聽ひていたといふことである。

師は、このさゝやかなる寮舍に於て『起信論』『五敎章』『探玄記』等を全部講了したが、宗乘にては大部なものでは嘉永三年から『御本書』を講述し初められたが講義半ばにして同五年四月病を發して全部を講了することが出來なかつた。

四

師は平生禪風を好み、隱元、木庵、高泉、獨立等の書畫を大へん喜ばれた。その日錄の諸所の頁に散見する文句を見ても、師の居室の床の間には、これらの書畫を毎日のやうに掛け換へては、これを眺めて樂しんで居られたやうである。師が、これらの書畫

を嗜好されることを聞き傳へて遠近の門信徒が、わざ〳〵師を訪ねてこれらの書畫を見せては師を喜ばし、又師に贊を願つたこれが、やはり目錄に出てある。

これが爲め師には禪的な所があつて、いつも拂子杯を持つて禪風を學んで居られた。自ら拂子の畫を描ひてこれに贊をして

世の中の五つの欲(す)(拂子)もちかへず
彌陀のみくにに生れんとほつす

と詠んで置かれる。所が、ある時、學德一世に高ひ香樹院德龍師が日溪社中の請に應じて日田の本誓寺へ來られて自信敎人信

の講釋法話せられた時、伏明師は香樹院師と對話せられてから、その感化を受けられたものと見へ裳衣にて佛祖の崇敬を一層大切にせられたとのことである。

五

師は和歌をよくし又狂歌をもよくし、漢詩に最も長じ又俳句をも嗜まれた。

師が如何に漢詩を好くせられたかは左の逸話によりて知ることが出來る。ある年、伏明師が京都に滯在して居られた時のことである。伏明門下の阿難、目連と言はれ當時の人々から『了英遊識此兩名、熟兄熟弟看難品』と評せられた了英、遊識(瑕丘宗

興師)の二人を連れて東山に遊び互に盃をとりかはし興に乘じて詩を詠じて居られた。所が、その直ぐ向ふに賴山陽菘翁、篠崎等の一團がやはり同じく酒をくんで詩を詠じていたが、向うから試みに一詩を贈つて來た。了英は卽吟に妙を得ていたから直ちにこれに和韻して、弟子をして持たせてやつた。所がその詩が特によく出來ていたので大家揃ひの賴山陽の一隊も舌を卷ひて『弟子すらかくの如し、況んや其師をや』と言つて歎稱してをかなかつたといふ。

又、師が如何に脫俗洒落の風があつたかは、其狂歌に巧みであつたかに見ても知ることが出來る。師の日錄を見れば諸所に

自由奔放な氣分の横溢した狂歌を見出すことが出來る。就中

客僧の困るは雨の長ぶりに
御座のいねむり宿のかほぶり

といふが如きがあり、又『いねむり好きの老婆に和讃を作くりて自慢しける』と題して

うつゝの不思議をとくなかに
居ねむり不思議にしくぞなき

長法談もながからず
ふら〳〵すれどこけぬなり

といふのがある。その他、師の作にかゝる道味を含んだ狂歌

は『語錄』に收むることゝした。

又、師は、いつも『君子は獨り自らつゝしむ、我れは家内と二人がつゝしむ』のであると言つて居られたそうである。

師が或る時、愛知川の寶滿寺へ午前は講釋、午後は講話といふ約束で出張せられた時

ゆきもどり心に名利挿箱
講釋法話兩がけにして

といふ狂歌を讀まれた。これを見ても師の人格が如何であつたかを知ることが出來る。

六

又、師は和歌を好くし折に觸れ時に應じ、その光風霽月の風懷を洩らされた。又、俳句をも好くし師の詩想は行く所として可ならざるなしの風があつた。師にある人が加賀の千代の

足跡はとのごなりけり初櫻

といふ句を示した。師は直ぐ『觀經』の意を示して

足跡はおのこにあらじ初櫻

と吟せられた。これを見ても師の美しい雅懷の一面が窺はれるではないか。

七

師は嘉永三年から畢生の精力を傾注して『御本書』の講義

にとりかゝられたが、同五年四月講義半ばにして病を發し遂に元治元年二月二十七日遂に不歸の客となられた。時に年七十有三。

師の重なる遺著には

『起信義記日錄』
『探玄記日錄』
『五敎章日錄』
『愚禿鈔風鳥錄』
『最要鈔頂戴錄』

等がある。

伏明語録

長島淳心
竹中慧照
共編

一　身心の修養

大食するものは心に常にくゝりなきものなり、故に立身できず。

心のひいきすると身のひいきすると二つのこと。

身は死するもの、くさるもの魂は死せず、魂は檀那の如く、身は宿にてこる人足なり。

二　理屈知らいでも

『御和讃』に「一切菩薩のたまはく、われら因地にありし時無量劫をへめぐりて、萬善萬行修せしかど」とあり。我が身を用にぞれほど立てゝ見ても、つゞまる處は本の用に立たぬといふ所へかへらねばならぬ鼠が日輪樣を婿にとらんとして、かへりて本の鼠を婿にとりしがごとし。

理由は知らねども、阿彌陀佛はた助け下さるゝに違ひない。例へば日輪は東にある時は遠ひやうであり眞中へ御座りた時は近きやうなれども、それを强に知らひでも、眞中の時は暑く、東の時は冷し。これを强に

知るに及ばず。藥味を知りても知らひでも病はなほるなり。

三 南無阿彌陀佛は丸藥

灸も針も煎藥も散藥もいかぬ病人には丸藥を與ふればいやとはいはれぬ。自力作善の灸も針も煎藥もいかぬ難治の病人には南無阿彌陀佛の丸藥の外にはなし。

四 善根つみがたし

よきことは邪魔でつらふて面倒で
こむつかしふていやでならない

五 道は近きにあり。

『御文』に「まづ機をいへば」とある、その機とはむつかしいことではないぞ。

伐柯々々其則不遠とありて彌陀に助けて貰ふ機はどのやうな機にならねばならぬぞといへば、今朝も起きともなかつた、今朝も心氣が湧ひたといふやうな、その機を助け給ふのなり。別にかういふ機にならねばならぬといふのではない。卽ち不遠なり。

六 我慢の角はよし折らずとも

凡夫の心は佛どうらはら、佛は己が勝手を忘れて、たゞ衆生の勝手を思ひ、凡夫は人の勝手をかまはず、己が勝手を思ふ。我が惡ろきには氣がつかず人のわろきことには一寸さしたことでも氣がつき、人の惡きは憎くゝてこらへられぬなり。我がわろきはこりなしてゐるが我等の有樣なり。

我慢の角は折らずとも、せめて角で他人をつかぬやうにせねばならぬぞ。

七 人生行路難

富んでは嫉まれ貧にしては侮らる。金錢はないとほしい、あれば邪魔になる、どちらにしても苦の世界な

り。その上、世の中のことはあちらからも思案して返答せねばならぬことをいふてくる、こちらからも返事に困ることをいふてくる。これ苦の世界の有様なりその上四苦八苦さまゞこやかましひ。よりて古人は蜀の頭痛山身熱坂をわたるよりも世の中は通り難ひといふて置かれる。中臣祐爲も『新拾遺』に

山川の岩間づたひに行く水の
やすくはすぎぬこの世なりけり

と詠んで置かれる。たとひ浮世は痛ひと思ふて山の中に隠れても

谷の水、峯の薪木にあけくれて
岩間の中もいとまなの世や

世の中にいづれの浦の涙風か
心とまると立つ千鳥かな

と定家卿も詠んで置かれる。

八　罪悪は如來にまかせよ

ある人「我が身の罪の深きことを打ち捨てゝ佛にまかせ参らせて」とある文を尋ねければ、師は「平生の達者無事な時は我が罪が苦にならぬ故に、うちすてられたやうなれども、死ぎはになつて氣が弱く

なると我が罪が苦になるものぢや。よりて信を獲ねば實にうちすてることは出來ぬなり」と答へられたり。

九　淨玻璃鏡上の我等

人に恩をきせたことはよく覺へて居れども、人に恩を受けたことは直ぐ忘れる凡夫なれば、惡事をなしたことは忘れて、少しの善をなしたことは、いつまでも覺へて居る。人の惡は許し難く思へども、己が惡しきは何んとも思はぬ我等なれば、すべて罪を造りしことを忘れ又罪を罪とも思はざる凡夫なり。

我は罪を忘れ又罪とも知らねども閻魔の帳に、これを知るして漏らすことなし。我は善民に生れんと思へども閻魔大王は許し給はぬなり。

我は何も惡事は知りませんといへども覺があらふと言ふて、ひつ立てる。何も殺生はしませぬ、盜は致しませぬと言へば、何虛をぬかすなと言ふて鐵棒でくらはす。泣ひても、くやんでも無理に地獄にひつたてゝ行かれるなり。

一〇　睡眠煩惱

寢るものは牛と坊主と猫の子と

はらみ女と御座の同行

御文さまの時分にやつと目を開ひて、今夜のわた話は短かゝつたといふ。唐土に三年の間寝つていて目を開ひて、一昨日は御馳走で御座りましたといへると同じことなり。

一一　亂世の難を知りて治世の恩を知る

費長房仙道を學びたるが、こうく餘りに六つかしいので中途でやめてしまふた。それにわた互は況んや聖道の修行をや。聖道の難を知らぬからして他力の有難きを知らぬなり。亂世の難儀を知らぬ故に治世

の有難きことを知らぬなり。

一二　論主の一心

論主の一心とは我等から論主の如き、すぐれものになるに非ず。論主の方より我等凡愚に同じ給ふなり宮女も衣服を脱し莊を取て裸形にすれば乞人も同じきが如し。一大僧祇の功德の衣服を脱し智慧の莊を取りたれば我等と同じ妄念煩惱の身と成り、たゞ阿彌陀如來に助けて貰ひ給ふが一心なり。

一三　天が地となり地が天となるとも

善勝房曰く。往生極樂は易しと思ふまでが大事な

り。易しと心得つれば卽ち易く助かるべきなりと。今度の極樂往生は他力ゐへ參るなり。一分も自力の心がありては往生は遂げ難し。況んや雜行雜修の心を捨てずしては何んとやらん往生が六ヶ敷氣に煩はされて、とても往生一定と易く心得ること出來ぬなり故に往生に案んじ氣の止まぬ、氣遣し心の離れざるは未だ他力がたのまれぬなり。他力の信が獲られたれば、あら心得やすの安心また、あらゐきやすの淨土やと疑ひなく思ふて喜ばるゝなり。故に天が地となり地が天となる例が有らふども我が往生の間違ふ例は無

いぞ。あら嬉しや、かたじけなやと思ふまでが大事なり。

一四 竹の贊

竹の子は竹になるなり人の子も
人になれとのうつしゐやこれ

一五 遇善知識の喜

文政三庚辰年七月十八日西圓寺にて法談の時。「眞の知識に遇ひ奉り教の如く信ずれば生死の苦を拔きて眞の樂を得る道を教へ給ふ。この知識に遇ふことは無量劫にもまれなり。然るに今時の我等、正しく眞

の知識に遇ひ奉り淺からざる御慈悲よりの御教化に逢ひ奉るといふは誠に有難き仕合せなり」と。

一六　生々世々の因縁

又曰く。

「一樹蔭一河流袖のふり合せも多生の縁といふこと あり。これは深く親しみを成すにも非ず、永く好みを結ぶにも非ず、唯一時の出合或は同じ水を飲むなんぞいふ假りの好みといふものゝ、それすら多生の縁といふ況や眞の善知識に逢ひ奉れば未來永々劫の苦患を脱する道を教へ順次生に報土に往生する信心を獲さしめ給ふ深き契り、永き親みを結ばしめ下さるゝ此こゝろに逢ひ奉ること、豈小縁ならんや。生々世々の厚き因縁の御催しといふもの」と。

一七　一度の違ひが一期の違ひ

「法にはあらめなるがわろし。世間の事は疎略にしても然るべし。萬一仕損じたるとき又仕直しの出來るといふこともある。後世の一大事は一度仕損て二度取かへしの成らぬ大事。一度の違ひは一期の違ひなり。一度意得たがうたれば萬劫の意得違ひとも成るなれば大事も大事、以ての外の大事なれば、よく〳〵

意ふべし」と。

一八 客に松茸、佛には菊

師の『日錄』の一節に曰く。

近來三月三日不見桃花九月九日無有黃花因詠曰

世は季かもゝの節句に桃さかず

菊の節句に菊を見ざれば

徒以十月爲菊時節是故余嘗有詠曰

御とりこしつとめるならばよき時節

客に松茸ほとけには菊

一九 「心を一つにして」とは

六月十三日夜、原武右門御寄りの時、武右門「心を一つにしてとは、どう心を一にするので御座りまする」と尋ねければ、師の答に

「こゝろをひとつにするとは、たのむこゝろをひとつにすることなり。心を一つにしてたのむといふは助けて貰ふと思ふ心ひとつになるなり。こんと阿彌陀如來に助けて貰ふて極樂參りと思ひ定めた心が心をひとつにしてたのむといふものなり」と。

二〇 善知識は我等の仲人

女子は父母の家は我が棲家に非ず、必ず夫の家を我

が家と片付かねばならぬ。我等衆生はこの人界は己が住家に非ず。死ぬれば必ず五道の中何方へか趣かねばならぬ。仲人は善知識。仲人の言葉に從ふが卽ち夫に身を委するなり。善知識の仰せに從ふが卽ち彌陀に歸し奉るなり。善知識の仰せに先づ一度從ふて再度阿彌陀佛に歸命するといふに非ず。故に善知識の言葉の下に歸命の一念發得すこのたまへるは是れなり。故に祖釋には釋迦彌陀二尊の勅命に從ふと釋し給ふ。釋尊の言に從ふが卽ち阿彌陀如來の仰せに從ふなり。

二一 和讃のこゝろを

『十方三世の無量慧、たなじく一如に乘じてぞ、二智圓滿道平等、攝化隨緣不思議なり』といへるこゝろを

みちぬればかくるならひの世の中を
はなれていつもまどかなる月

三二 至心廻向と至心信樂

南無とたのむは衆生の三心。阿彌陀佛御たすけは佛の三心なり。佛の御たすけに二種あり。一には衆生に行を廻向してたすけ給ふなり。これは至心廻向の御たすけなり。二には衆生を心光に攝取して助け

給ふ。これは至心信樂の御たすけなり、至心廻向の御たすけは當來滅度の益を成ず、至心信樂の御たすけは現世の卽得往生住不退轉の益を成ずるなり。卽ち入正定聚の益を成ずるなり。

二三　本橋と假橋

ある同行、師に「一心一向とは如何なるとに候や」と尋ねければ。

「川に本橋もあり、又外に假橋もあり。どれから渡らうとまゝぢやと思ふている所に、川端へ行きて見れば大水の爲め外の假橋は皆落ちてある。その時、唯渡るべきはこの本橋ばかりなりと心中本橋一つになるなり。諸佛の假橋は煩惱の大水に落ちてしまうてある唯阿彌陀如來の本橋ばかり罪はいか程ありとも助けるぞと丈夫にまします故、たのむべきは唯阿彌陀如來一佛と心中が一つになることぢや」と。

二四　信心の切手

芝居の木戸口を入るには切手が要る。城へ入るにも手形が要る。手形を印鑑に合はす。今、機法一體といふも、信心の切手を本願の印鑑に合せたことなり。

二五　まひらせごゝろわろし

ある人、「蓮如上人はまひらせ心わろきぞ、まひらせ心といふは、これをして佛の御心にかなはんと思ふなり、これ相應をきらふにあらずや」と問ひしかば、師は「これは己が自力をもて身をつくろひ心をつくらふて佛の御心にかなふとするなり。これ返つて佛の意にかなはず。今、本願と相應するといふは我が自力でなすことは、とても佛の御心にはかなはじと、あやまりはてゝ、唯佛の本願に助けられやうより仕方なし。然らば、このなり助け給へとすがるが卽ち、佛の意にかな

うなり。

かの、まひらせ心の人は本願に相違せやふとすることを知らず。己がよくなりて佛の意にかなはふとするなり。これ佛の本願に背くが故に、また佛の意にもかなはざるなり。

ほとけより我にかなへん法なれば
我よりかなふことぞたやすき

二六　三品の懺悔

雜修自力の人と私共と懺悔の較べ合せをして見れば自力の人の懺悔は手强きやうで、この方共は懺悔も

改悔も手薄きやうなれども、自力の人はこちらの懺悔が役に立ち用に立ちて、それで往生を御免なされさいふやうに思ふ故に、かへりて我が身を誤りはてたる懺悔にはならぬなり。

他力の信者は懺悔は手弱ひやうなれども、この方は役に立つやうな懺悔も改悔も出來ぬ故に、たゞこのなり助け給ふ彌陀の大悲を頼むより、仕方がないとあやまりはてる故、却て實の懺悔に相叶ふなり。たとへばこちが謝りたでた役人が許して下されたと思ふては我が謝りたが自慢になり、實の謝にならぬ。わが謝り

た位で御免のあることではなけれども、御役人の御慈悲なればこそ、御免下さるゝなれと思ふてこそ、眞に謝り入るになるなり。

二七 我等は地獄の正客なり、極樂の正客なり

同じく生命うけながら同じやうに魂ありながら、如何なる理由ありてか鳥は人に食はれて苦しみ、如何なる理由ありてか人は鳥を食ふて樂しむや。不憐なるかなや、彼は人に食はれて苦しみ、畏いかなや人は彼を食ふて樂しむ。

よりて、この殺生の罪誠に天の憎む處なり。鷄卵一

粒うち破りてすゝるも皆この殺鳥の仲間にして屎泥處の正客なり。彌陀は淨土を莊嚴して、われ人を正客として待ち給ふ。鬼は地獄をこしらへて、我れらを正客として待つ。何れへ行きても皆正客なれば、唯心の望み次第なり。極樂參りがはずれたならば、どうでも地獄に落ちねばならぬなり。

二八 この世の火事、こゝろの火事

辰極月十六日朝の御法話に。

家内安全、火の用心。先づ一生涯を暮らすのは家内中いふ事なふ、心安樂に暮すのが第一。それに就ては

互に不請をこらへあい、勘忍第一にせねばならぬ。左樣に致すならば互に家内中が安樂に暮さるゝ。されども火の用心が大切で、如何に心安樂に暮して、さても火を粗末にするならば思ひがけない火事が起りて、我家のみならず在所中までも燒き滅ぼして心安樂に暮されぬやうになる。是によりて佛は火雖小不可忽と說き給ふ。星ばかりの火でも忽にする時は我家を燒き滅ぼし、その上、在所中まで黑土になす故に、小さき火と雖粗末にはならぬ。これは、この世の火事のこと。今、面々の胸のうちの火事はそれにもまして、誠に恐ろ

しい。その火事といふは瞋恚の腸、煩悩のこと。これによりて一念の瞋恚は無量劫の法財を焼くと説き給ふ。この瞋恚の猛火が未來の地獄の大火事となりて無量永劫に身を焦す。

瞋恚の炎のみならず、又貪欲の大水ありて功徳の寶を流し失なふのみならず我身を果てなき生死の苦海に漂はす。火は、はげしきもの故に火の中へ入りて死ぬるものは滅多にない。水は、もろやかなるもの故、水に入りて水に溺れて命を失ふ者少なからず。今も瞋恚は火の如ければ少しは慎しむべけれど、貪欲は水の

如くもろやかなるが故に、さほどに我れにも目にたゝず。そこで貪欲は起りても何んとも思はぬ故、朝夕起し通しなり。そこで無始已來今日まで、この大水に流され、今から末も盡未來際はてなき苦海に流されねばならぬ。かゝる者を彌陀は助けんとありて永劫の修行まし〳〵て、遂に得がたき南無阿彌陀佛の寶を御成就くだされ、さあ助てやらうとある。それで「和讃」にも無上寶珠の名號とあり、又天親菩薩は如意寶珠との給ひて、如意寶珠とは一切の意の願ひに叶ひ給ふといふこと。よりて、これを念ずれば大水も忽ち亡せる

なり。今名號が、その如く、我等が瞋火貪水も皆消へるやうに名號に御成就し給ふなり。

二九　扇に書き與へられたる歌

本誓寺永代經の終りの日、尼女房達きたりたりしにそれ〴〵の人の扇に書きつけられたる歌。

世のことは流してしまへ川島や
紫磨黃金の肌ねがふもの　川島八重の爲め

波のごとうごく心の內にだに
いく八萬歲もうせぬ信心

八十六むつら〳〵ところひこがれ
こがれてあかぬ彌陀の本願　門阪老婆

あなかしこわれら淨土十萬億
まひる御文の教化わするな　八十六歲の爲め

三〇　狂歌三首

大方の姑は臼の引手かな　門阪文の爲め

野田妙意の爲め

氣をまはしてやこすりごといふ

○

孝行をいたしたくあんたもふなら
親にしん氣なかほみせはすな

○

いろけをば離れて食ひ氣、食ひ氣まで
はなれるとても佛はなれな

三一　帶一本から身代限りをする

十二月二十日新講法話

鍔のよきを得る者、常の刀の鍔をその鍔に入かへた

る時、又常の緣頭の不相應なるを思ふて、又これを改め而して、又鞘のみにくきことを思ふて、亦これをも仕かへぬれば目貫も不相應なる故、遂に身をもかへ切羽はゞや鵐目までかへそろへるに至る。而して後、平生の印籠巾著のみにくきを思ひて又これを改む。而して又衣裳をも改め、而して平生の友をも下品に思ひ上品の友を求めて交はり、而して家屋敷の不相應なることを思ひて大に造作を始め、遂に身上をうしなうに至るなり。實に奢靡は微なる所に於て謹しむべし。然るに人信心のよき鍔を得たと思へども念佛の緣頭の間

斷がちに不相應なることを思はず、念佛すれども身の嗜の印籠巾著衣裳のみにくゝして念佛者に不似合なることを思はず、身をたしなめども友交りの不相應なることを知らず。御取持の家屋敷の不相應なることを知らざるは何ぞや。奢に反してこれを思ふべし。

三二　三經一口辯

たのむものはまひらるゝことあるが大經の教。罪はいかほど深くとも助けて下さるとあるが觀經の教。それにちがひなひと證據をみせたが阿彌陀經なり。

三三　顏の美しきと醜きと

人は唯、淨玻黎鏡の業道を寫すことを知りて現在の鏡も亦然ることを知らず。姿のみよきは前生柔和忍辱の善業の寫りたるなり。顏の醜るしきは瞋恚嫉妬の業の寫りたるなり。

なほ又智慧の鏡あり。善惡是非みな心に見ゆるもの則ちこれなり。善を善と知りながらなさず、惡を惡と知りながら止めずして、心の暴なるは、この鏡を曇らすなり。鏡遂に曇り曇らば是非邪正の辨へもなき心となり愚痴增上の畜生とこそなりぬなり。又深く愼むべし。この故に己が顏の美しきを寫さば後の世も

又かく美しからんことを願ひて柔和忍辱を勤むべし
又己が醜きを見ば、この世限りに醜きをすて後の世は
好き姿ならんことを思ひて瞋恚嫉妬を誡しむべし
唯何よりも鏡を知るに就ても淨土往生を願ふべし。
淨土に生れなば醜くきものは美しき佛となり顔好き
ものは、この世の顔好きに幾千萬倍ましたる相好如金
山の佛になるべし。

三四 六十年來咬菜根

十月一日藤九に於て法話の時下齒一つ脫ければ、そ
の夜、自坊に歸りて賦して曰く、

六十年來咬菜根　保吾身命助吾言
今宵憐汝一期盡　後夜殘燈癯影存
草葉ならず木の葉にあらで葉(齒)のちるは
いづれの風のさそうなるらん

又、この歌を翌日に至りて改作して、

木の葉にも草葉にもあらで落つる葉(齒)は
いづれの風のさそうなるらん

とし給へりと。

三五 過去のわが姿

犬の嚙みあひ苦しむを見ても、これも昔の我が姿と

想ひ、牛の重き荷物を負ひて惱むを見ても、これも過去の我が姿と想ひ、鳥の餓にて鳴く聲を聞きても先生の我身の姿と思ふべし。今彌陀を信ぜざれば又かくの如き身となるべしと思ふべし。

三六 甘酒進上

ある夜、榮治の家にて法座ありけるが、參詣の人々に甘酒を出しければ、師は卽ち、

甘酒をのみに法座へ出る人も
こゝまでこひと彌陀やまつらん

三七 疑一つが

同夜は「選擇集」の「生死之家以疑爲所止、涅槃之城以信爲能入」といふ文を讃題として法話あり。その「所止」を話さるゝに、

「寺へ參らぬについて炬燵に止られ、娘にとめられ、亭主にとめられ、仕事にとめられ、右の所止なくして然かも參らぬは、たゞ邪見にとゞめられるなり。極樂へ參るに止めるものはない、あらゆる煩惱も惡業もとめはせぬが唯疑一つがとゞむるなり」と仰せられたりと

三八 雜修の人と專修の人

雜修の人は我身が往生の用に立つと思ひ、我が勤め

た念佛で往生を遂ぐると思ふ故に心に輕慢を生ずるなり。それは如何ぞと言へば、こちは是程申す故に上品上生の往生。あの人は、こち程には出來ぬ故に下品下生の往生位ちやといふやうに人を輕ろしめ侮る心になるなり。他力專修の人は我が機をあやまりはて、我が申した念佛の力の多ひ少ひによることではない、唯如來の稱ふる者を助けずばをかぬの御力一にて助かるぞと信ずる故に我が勤める所を自慢することもなく人の勤めの少きを輕しむこともなきなり。

三九 和歌二首

大方のこゝろのまゝにする人は
こゝろのまゝにならぬ身となる

○

大方のこゝろのまゝにせぬ人は
こゝろのまゝになる身ぞなる

四〇 苦樂は表裏

雨降らざれば傘賣れぬ、雨はれざれば傘張れぬ。人間は苦樂ある故に成佛のなることなり。然れば共に歎くべきにあらず。これ我等が出離のもとでたるなり。

四一　障多きに德多し

廉范成都の夜、火を禁ず。而して後、夜火を禁ずる令をゆるめ、かはりに水を貯はへしむ。民大に喜びて火事なし。今、祖師聖人の御一流は煩惱の火を禁ぜず、信心の水を貯はへしめ給ふ。

四二　欲の狐

「法華經」に「諸苦諸困貪欲爲本」とあり。欲は狐の如し。玄忠法師といふ人、墓林に宿せし時、狐髑髏を頂きて美女と化け、道の傍に立ちて泣きて、馬に乘りて來る男を騙して曰く。妾はこの邊張氏に嫁して寡婦

となり難儀故に鄉里の易水に歸らんとすれども女のことなれば夜分獨り行きもならぬ故、泣いている所なりといふ。男これを憐みて我が馬に乘せて伴ひ易水に行かんとせしを玄忠出で、件の男にこれ狐なり、汝狐に化かされたるなりといふ。男肯んせず。よりて玄忠錫を鳴らし多羅尼を唱ふ。忽ち狐化けを現して敗げうせたり。玄忠は佛の教なり。男は我等衆生なり。狐といふは欲なり。

うれしうも又かなしうも思はする
欲の狐が人をばかして

四三 御名の乳房より

幼な兒が病氣になつても藥を、ゑゝ飲まぬ故に、母親が代りに服藥する。衆生が、ゑゝ善根を修せぬ故に阿彌陀如來が代りて修行して、信ずる時に乳にして南無阿彌陀佛の乳房より功德も善根も與へ給ふなり。

名醫の藥を服するには此所の方で加減することはいらぬ。阿彌陀如來の名號不思議に助けらるゝには此所の方で智慧や持戒を加へるには及ばぬなり。

四四 誠の約束

約束とはくゝりてちらばらぬやふにすることなり

極樂往生の間違はぬやうにくゝり給ふなり范式が張劭と京の學校に於て約束して二年後の何月何日に君が家に至らぬといふて別れて各々國へ歸へりしに、百里の途を距てゝ、然も二年前の約束通りに果して張劭の方へ來りしと。實の人は約束は少しも間違へぬ、況んや阿彌陀如來の御誓に於てをや。

四五 我が家の障子の破れから

天保丁酉二月十八日夜、綺田源通寺に於て忠藏の法事ありける時、「命のうちに不審も、とくゝはれられ候はでは定めて後悔の身にて候はんずるぞ」の御文

を讃題として仰せに。

『凡夫の心は佛とうらはらになる。佛は己が勝手をわすれて唯衆生の勝手を思ひ、凡夫は人の勝手をかまはず己が勝手を思ふ。我が惡るきには氣がつかず、人の惡ろきことは少しでも氣がつき、人の惡るきは憎くつてこらへられず、我わろきはとりなしをしてをるなり』と。

又、同じき時、仰せに。

『頭の角は折らずとも、せめて角で人をつかぬやうにしたきものなり』と。

四六 嫁の不足は姑に不足

同、二十二日專明寺にて、ある同行に對して

『嫁の不足をいふは姑に不足をいふことになる。子の不足をいふは親に不足をいふことになる。信者の不足をいふは阿彌陀樣に不足をいふことになるぞ』と。

四七 解信と信仰

鹽を手に塗りて燒け火箸を、しごく秘法あり。かくすれば火傷をせぬと承知しながらしごく氣には、ゑゝなられぬ。これはまだ眞實に承知が出來ぬからなり彌陀たのむ計りで御助けと信じたやうなれども、いよ

たすけられて淨土參りのなられぬは、やはり實は信じられぬなり。

四八 人心と道心

遊女はすきで我が本妻はきらひ。これ外のことにあらず。遊女はすきな酒を飲ますやうにし、本妻は飲むなといふ。遊女は遊べといふ、本妻は働けといふ。遊女はうまいものは幾干でも食へといふ、本妻は養生が大事なりといふ。それで遊女がすきになり、本妻がきらいになるなり。遊女のすゝめは人心なり、本妻のすゝめは道心なり。何人でも道心のすゝめは氣にいらぬものなり。

四九 茶山の詩と千代女の俳句

九月七日午後、伊勢兵なるもの來りて書畫數幅を持ち來りて師に示す。茶山の詩あり、曰く

誰家采蓮女　見人深隱花
風起花撩亂　時々露髮鴉

又、中に千代女の短冊あり、曰く

足あとはとのごなりけり初櫻

五〇 安樂庵の歌に和して

又、そのうちに安樂菴の短冊あり、「浦上の月」と題

して曰く

和歌の浦やむかしにかへる波の上に
ひかりあまねき秋の夜の月

とあり。師これに和して

てる月のひかりに和歌の浦波は
むかしにかへるたもかけぞ立つ

五一　千代女の句に和して

翌日に至りて師は、前の千代女の
足あとはとのごなりけり初櫻

と咏める句を思ひ出して彌陀の本願は韋提を以て先

達となすの意を咏じて曰く

足あとはたのこにあらず初櫻

五二　狂歌六首

○

壬寅十二月二十六日

こし越しにかぎるものかは鬼はそと
常にこゝろを豆にして打て

○

貧乏の方は時代でかきかゆる
むかしはともし今はぜいたく

○

疹の守り鼻の守りして歳のくれ（發句）

炭のあたひの高きをぞ知る（付句）

○

餅搗をしたればこれも貧ならず（發句）

やぶれふすまはそのまゝにして（付句）

○

世の中は唐臼拍子にさも似たり

うれしがつたりかなしがつたり

○

九月五日朝作送了英和歌今日當子日

きのふけふ日をよみてこそいねといへ

うしごらいひてどゞめんものを

五三　座敷の井

文政十年三月二十一日夜、倉本十錢講にて法話あり

仰せに

「春すぎ秋きたれども進み難きは出離の道、花を惜しみ月を見ても起り易きは妄念なり」と。

又、仰せに

「十惡の法然房と仰せらるゝに就て、我身罪なく又淺

しと思ふは卽ち是れいよ〳〵罪の深き理證なり。よく掃除せる座敷に少しの芥が落ちてあつても直ぐ目につく。一月も二月も掃かぬ座敷に多く塵があつても少しも目につかぬが如し』と。

五四 同行の問に答へて

同じく席上安井墨女の尋に答へて。

『機の淺間敷を先にして本願の尊きを後につけて喜ぶべし。本願を先にして機の淺間敷を後につけてはなげきとなりてしもうぞ』と。

又、同じく櫻木利平が『佛法未だ渡らざる、そのさき

如何』と尋ねけるに對して仰せに。

『醫術未だ渡らざる、そのさきに病あり、この病を治する醫術ありしが如し』と。

五五 王法と國恩

同、三月二十七日初夜、御法話の時、蓮師の「王法はひたひにあてよ、佛法は內心に深くたくはへよ」との仰を引きて

『王法は王の法なり卽ち五常なり。國王は恩の深きを知らば、その仰、その法は守らねばならぬ。親の恩を知らば親の仰は用ひねばならぬ。よりて先づ國恩の

深いといふことを、よく〳〵知るべし。別して佛法を耳にするものは國恩の深きを知るべきなり」と。

五六 席上茶話

同、三月二十九日夜、本町文石家御寄の御法話の後、席上茶話として左のた話ありしと。

一　六十、七十になりても柿を接て、その柿を食ふ心持なること。

二　落るものは自然と落ち、上るものは手傳はねば上らぬこと。

三　佛はなき地獄をありと說きて人を落し給ふいはれなき證據、それは無畏施を本とし給ふこと

四　妄語戒を立て給ふ佛に妄語あるべからざること

五　佛法は出世間の爲めにして世間を治める法にあらざること。されども出世間の法を修すれば自ら治世の益あるは米を採れば自ら福を得るが如し。

五七 遠水不救近火

遠水不救近火、遠親不爾近隣といへることあり。自力の教は遠水のごとし。我等の今をも知れぬ未來の近火は救ひ難し。たのむ一念に助かる彌陀にすが

るにしかざるなり。

五八 ものごとの苦になる時

ものごとの苦になる時、阿彌陀如來の我等の後生を御苦に病ませられ、五劫の間食はず、飲まずの御思案なされたることを思ひ出し佛恩を喜ぶべきなり。

五九 問答三則

上大久保武左夫婦來りて不審の趣。

一武左曰。名利勝他は世間にも佛法にも、ともに一樣につゝしめと耳に致し候。

女房曰。妾は佛法方に付てのことに耳に仕り候。

いづれにて候や。

答曰。佛法の上には勿論のことに候。世間にも及ぼし候て、なるべきだけは、つゝしむべきことにて候。五欲の家に棲むもの、世間のことに名利をこゞむることは難し、佛法方のことは一樣には、つゝしみ難し。然れども唯佛法方に付てのみこいはゞ、世間のことは名利勝他を恣にして邪見に落べし。よりて佛法の上には愈々つゝしみ守りて、兼ては世間のことにも及すべきことにて候なりと云云。

一武左曰。耳に仕り候も、已に本願他力の趣、耳に仕り

候上なれば、自身の耳にひきあてゝ耳にする心持にて耳に仕り候が如何。

答曰。高慢にまぎれてわろし。唯、我身は何も知らぬものなりと思ひて御聞かせ有難いと心得て耳にすべし。其元の仰の如きは我れ已に心得顔の分際に陷ひるものなり。道宗は、いつも耳に申すが初たるやうに有難しと申さるゝなりと云云。

一武左曰。これまで耳に申し候ことを捨てはてゝ初めて耳に申す心になれとは聞ねにくゝ候。萬一に違ひ候ことを耳にさせ候ときは、これまでの耳に致

し置き候ことを棄てゝ間違ひ候ことを聞き得べきにて候や。

答曰。さにあらず。これまで耳に仕り置き候ことを棄よと申すにはあらず。我れより、これまでも耳に致して居るの慢心をさし置き、唯御聞かせ下さることが有難ひといふ心になりて耳にすべし。蓮如上人の御助けありつることのうれしさよとは、喜べは自力にまぎれてわろし。御助けあらふすること の有難さよと喜べよと仰せらるゝが如し。一念歸命の立所に御助けありたるに違ひはなけれど、喜ぶ

者の心得は御助けあらふすることの嬉しさよと喜ぶなり。今迄に一念の安心の趣、飽迄耳の中に置きたりとも、その上にも耳にするは我れは何にも知らぬ身の上、たゞ御聞かせ下さるゝことの有難さよといふ心得にて耳にすべきなりと云云。

六〇 三毒の起る心を

常に三毒にくるはさるれば決定して地獄に落つべし。三毒は惡るきこゝしりながら止むること能はず。然れば彌陀にすがるより外に手立なし。

六一 善き夢見んと思ふても

善き夢見んと思ひたくんで寝入ることも、善き夢見ることはならぬ。たゞ眠にまかせて夢を見る如く、次の生に善き所へ生れんと思ふも生れることはならぬ。たゞ業次第に趣かねばならぬぞ。

六二 自力の行

自力の行は先づ身を棄てゝかゝらねばならぬ。

身をすつる人はまことにすつるかは
すてぬ人こそすつるなりけれ

六三 信者と未信者の行き先

臨終に、あじきなくなごりをしきに就て、不信の人は

行く先き定れば唯なごりをしき計りなり。信者はこの世を眺めては棲み慣れし娑婆なれば、なごりをしけれども行く先きを眺れば彌陀の御助けに間違なければ、いよ〳〵たのもしき計りなり。

六四　三井の鐘

五月雨や八景は三井の鐘ばかり

八宗のうちで、當今は、たゞ彌陀他力の本願の鐘ばかりが宗旨の中の宗旨ぢや。

六五　蠅

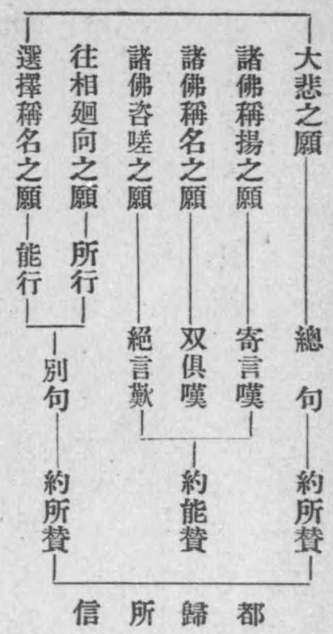
蠅は、あらゆるものに、とまれども火の上には、とまらず。我等の心あらゆる處にうつりとゞまれども後生のことにはとまらぬなり。

六六　機なげき心

機なげきは機の深信に似たれども、かへりてうらはらなり。機なげきは、かへりて機の高慢なることなり我方をよきものになりて助らんと思ふ下心ゆへ機をなげくなり。

六七　行卷願名

按行卷初願名



六八 治兵衛曰く

下安治兵衛曰く。

「命あるうちは治兵衛で御座いまするが、命終れば地獄の罪人で御座りまする」と。その翌日治兵衛、水口山路にて薊を手折りて持ち來り、古き句あれば思ひ出てわざと手折りて持ち來るとぞ。その句に

花咲て葉もすてられぬ薊かな

六九 禍福はかり難し

十二月二十日夜、藤九法話の後に。

「人ごとに起伏はかり難し。竹は御簾となりては三公九卿まで下に見下し、茶筅、茶杓となりては、千の利休紹鷗、紹巴等にもてはやさるゝは福なり。然るに多くは壁骨になりては泥にぬりこめられ、籬竹となりては風雨にさらさるゝは禍なり。桐は琴となりては皇后女御の手元にかしつかれ、天子東宮の御膝の上へも昇

るは福なり。然るに多くは下駄足駄に造られ泥の中へ踏こまるゝは禍なり。まさに知るべし禍は多くして福は少きことを」と。

七〇 智者の幸は愚者の不幸なり、

智者之所レ幸者愚者所レ爲不幸也。

七一 三重の悔

「遺教經」に三重の悔あり。

一には老後の悔。盛んなりし時勤めざりしを悔るなり。二には臨終の悔。平生に修せざりしを悔るなり。三には死の悔。閻王の責を蒙る時悔るなり。三

重の悔の次第のうち、後のは前々にも増して悲しみ骨髓に徹るなり。

七二 大福長者と貧亡人

大福人が貧亡人を招くに平生の姿にて來たれこいふは、これ施主より客に相應するなり。彌陀如來もその如く、そのまゝ賴めとは彌陀の方より衆生に相應しましますなり。

佛より我れにかなへし法なれば
我れよりかなふことぞたやすき

七三 女の紺足袋、武士の無腰

女の紺足袋、武士の無腰なのは不似合なり。念佛行者の我慢なのは女の紺足袋、報謝と掟を忘るゝは武士の無腰なるが如し。

七四 下女には大根の皮むきが相應なり

人の法事等の準備に見舞ふた「手にかなふことあらば御手傳申さふ」と言ふて往くべきことなり。「何になりとも」と言ふて往ひた時に、女中に献立書ひてくれと言はれては困り、こちらのやうな坊主に茄子の皮むけと言はれては困るなり。諸佛の願は女中に献立かけ坊主に茄子の皮むけなり。彌陀の本願はあな

たの方より相應なされて、坊主には佛檀の掃除、下女には大根の皮むけなり。それならば、此方からは又はいく〳〵と言ふて亭主のいふことに相應することが出來る。雑修の人は、我が機の惡ひといふことを知らず、我が身や心をつくらふて佛の心にかなふとするは手の書けぬ女が献立を無理に書ひて施主の氣に入りたく思ふが如し。

七五 嫁せんとする我が娘を誡むる條々

伏明師、其姉文子の他に嫁せし時鏡匣の袱に書き記して遺はされしものに、曰く

一　生涯いづれ心にかなふこと稀にして樂はならざるものなり。

但し道にかなふを樂としていかなることもたゝこらへて常に顔色をよろこばしめ給ふべきこと

一　夫には、つゝしみうやまうて、しかもうちとけ給ふべし。必ずこゝろやす立し給ふまじきなり。年五年に至る迄は兎角夫の疑念かゝらざるやうつゝしみ給ふべきこと。

一　嫜姑は内宮外宮の神とたふとみ、かりにも仰せにそむき給ふべからず。また下女抔の嫜姑の惡事

を告るを喜び聞き給ふべからざること。

一　下はしたはたゝかなる者とこしりて、しかも侮り給ふべからず。あはれむ心もかく、みだりにいかり給ふべからず。

一　いかなるはづかしめをも、うけ入れていひわけし給ふべからざること。

一　人のあしきは我行きとゞかぬ故とこゝろに給ひて人をとがめず、たゞ我身をせめ給ふべきこと。

一　後生は内心にふかくたくはへ給ふべきこと。

右の條々心形を改むる鏡なり。朝な〳〵これを

かゞみ給ふべきこと肝要なり。

たらちねの親の守と書き送る

文なわすれそことしげくとも

天保午三睦月　花押

後、この事を聞き傳へて我れも〳〵と鏡かけの袱に右の六ヶ條を師に請ひて書きて頂きしと。

七六　病中吟

晝睡忘服藥　夜醒慵誦書

病軀人未棄　落日嘆歸歟

○

病魔降不得　閑却一樓晝

多謝佛恩洽　養痾食有魚

○

春色病中盡　杜鵑屋上飛

豈無慈父待　樂邦不如歸

○

頻疑無左手　吾豈普通僧

如今堪慚愧　爲法斷不曾

○

老來難力疾　書几日添塵
不怪無人到　衰殘鬼作隣

七七　聖道の難を知りて淨土の易を喜べ

二月二十四日夜、藤九たよりの時、仰せに。

「費長房仙道を學ぶこと難し、況んや聖道の修行をや聖道の難を知らぬ故、他力の有難きを知らぬなり。亂世の難儀を知らぬ故に治世の有難きことを知らぬなり」と。

七八　則我善親友

同、二十七日の初夜、自坊にて「他力の信心うるひと

を、うやまひたほきによろこべば、すなはちわが親友ぞと、教主世尊はほめたまふ」の和讃を讃題として法話し給ふ。その時、大經の「見敬得大慶、則我善親友」とある文を引きて仰せに。

「見敬とあるは阿彌陀如來の御心を見て敬ふことよりて親友とほめ給ふ。親友とは心をよく知りあふたよき友達のことなり。即ち釋迦と彌陀なり。子貢が孔子に鄉人に皆ほめられんは如何と問ふた時、孔子は好き人にはほめられ、惡しき人には憎くまれんと。ほめられるも好き人にほめられるにしくはない。今は

教主世尊がほめ給ふのなれば、これ程のほめ手はなきなり」と。

七九 着物きたまゝ

自力の人の行作を見て羨やむ心あれば、自ら我が身の惡しきを顧みて恥じ入るべきなり。深き川を徒渉するものは着物を拔き、荷物を置かねば渉られぬ。船に乘るものは着物も荷物も、ころるには及ばぬ。今、當流の行者自力の人の妻子を棄て持戒する樣を見て羨んだり疑つたりするは、たとへば船に乘る者が川を徒渉する人の裸になるを羨みたり、あの人は裸になるに此

方は着物を着て居ては渡れまいかと疑ふと同じことなり。

八〇 求めずされど與へられたり

たとへば、よき茶碗くれよと人のいふた時、くだされと求める心に、よき茶碗といふても土か石で製へた茶碗なり。ところが、茶碗を貰つて見れば銀の茶碗であつた。これ銀の茶碗をくれたのは此方の求めぬ茶碗をくれたのなり。

信獲ぬうちは頂くも此方が少しは手傳はねば信心であらずと思ふて、それを求めて居るなり。ところが

實に貫つて見れば求めぬこころの思ひがない。彌陀のまるだすけの御信心を頂くのなり。

八一　よく眠る同行に

天保丁酉三月九日夜、正崇寺にて法談の時、座によく眠る同行ありければ。

「慶聞坊はよく眠るた弟子でありた。よりて蓮如上人は川の須へつれて行き舟を此方へ引きてしまふてよい眠り所ぢや、寢やつしやいと仰る。こころが段々潮が滿ちてくる。慶聞坊が、御師匠様どうぞ、その舟をといふ。蓮如様はよい眠り所ぢや、寢て御座れと仰し

やる。これ眠むるといふとも後生は大事、今死ぬると無常を恐はがらぬからのことなり。よりて寢むたがる目の玉へ後生大事の振子を張て聽聞さつしやい」と。

それより件の同行、眠ることなかりしと。

八二　他力と邪見

他力と邪見と間違へぬやう。さる同行がある同行の所で内佛へ御禮申した所が、御佛檀の抽斗に御本山へ上る金子が十両ある。これこそ如來の御方便なりと、たし頂ひて盜んで歸つた。それを何んでもあの同

行が盗りたるに相違なしと追かけ捕へて袖に手を入れた所が、茲に三両、かしこに五両と隠くしてをる。ごつこいをのれ、珠數かけた同行のくせに盗むとはこいへば、今の盗める同行、「盗すませて盗すませ給ふ金なれば、盗すむ心も我と起らじ」といへり。これ邪見なり。

八三 我慢の心を曲げるには

ある同行師に「方便とは如何なることで御座りまする」と尋ねければ、師は直に。

『竹を曲げるに直に曲げては折れる、そこで火に炙りて、そろ〳〵曲げると上手に曲るものぢや。これが竹を曲げる方便ぢや。今、我が我慢の心を曲げるにはれ稱名の火に炙り〳〵さして貰うのぢや』と。

同行、泣ひて喜びしと。

八四 女は諸佛と角力とつて勝つた者

女は諸佛をなげたぞや。どうでも丸裸で諸佛と角力とりて、なげたと見へる。その證據には御文の中に「なか〳〵諸佛の力にてはかなはざるときなり」とあり。

經に女の五力を說き給ふ。

一には色力。女の色にかけると鎧兜の大將も皆降服するなり。ゑんや判官も女故に腹切りた。高の師直も女故に首斬られた。

二には子力。子供が出來ると子供をだしに朝も九つ時まで寢て居る。妾は寢て居りたくはなけれども この子が離しませぬで、泣ひてもよければ起きましやうなどゝいふて寢て居る。

三には眷屬力。手前の親類を自慢に思ひ力にし、夫の親類を惡くいふ。

四には善業力。嫁入してから五六年たつと手前が

家諸道具も皆こしらへたやうにいふ。

五には自修力。手前の針仕事などを自慢にする。

八五 信火行煙

火も蓋すれば煙あがらず、信も煩惱の蓋すれば行が怠たる。

八六 久方の月の中なる

九月九日巳刻了英師、師に話して曰く「我が友越前の在樹なる者嘗て和歌を日野に寄す、曰く

久方の月の中なる桂だに
君をば松のかげとみへなん

と」又曰く「在樹の師某に睢鳩の和歌あり、曰く

鳩の子の三か二になりてなく
聲かあらぬかきゝこゝろみん

と」師これを聞きて曰く。

「後の歌解し難し、蓋し故事あるか」と。

八七 水鼻の歌

師、老後に至りて鼻水を患はれたること『日錄』の所々に出づ、よりて和歌を詠じて曰く。

ほとけには見もれごわれは水鼻の
落つるもはやき地獄なりとは

八八 太陽の前の星の光

師の御話に「八地以上の菩薩は任運無功用に念々に功德倍增するだに、また一大阿僧祇劫かゝらねば佛になられぬ、それ程の佛になるのに今日の凡夫の嗜んだの慎しんだの位が往生成佛の間に合ふ筈がない」と

八九 一日の用意と後生の用意

又曰く「先き遠く用心する程すぐれたるはなし、一日の用意するものは、一月過ごすうちに困ることあり一月の用意するものは、一年のうちに困ることあり。一年の用意するものは、一生のうちに困ることあり。

一生の用意あれば、一年の用意は自ら出來、一年の用意あれば、一日のくらしに事を欠くことなし。一月の用意すれば、一日のくらしに障りあることなし。これによりて一生の用意ばかりをして居らば後生の障りあるべし。後生の用意をし信を獲て能く王法を守らば一生の事にさし障りなかるべし」と。

九〇 贐

伏明師の高足了英師、師の門を辭し歸國せられしとき、老師贐として贈られし歌に

阿彌陀佛のちかひしなくばいかばかり

今日のわかれはかなしかるらん

又、僧と題して

「忘レ利而求レ名者當今之名僧也應レ知」

と書き示されたりと。

九一 處世二十一要法

深井姓のため書して贈る二十一要法。

一孝の要は父母の恩を思ふにあり。

一悌の要は順を尚ぶにあり。

一忠の要は人のことゝせざるにあり。

一信の要は義にうつりて守るにあり。

一仁の要は己に克つにあり。
一義の要は利を先にせざるにあり。
一廉の要は私を畏るゝにあり。
一恥の要は義を尚ぶにあり。
一儉の要は不自由をこらるにあり。
一勤の要は明日にもづらざるにあり。
一家の要は人の和するにあり。
一和の要はにくまれざるにあり。
一商業の要は時を計るにあり。
一相談の要は我をはなるゝにあり。

一兄弟子の要はあなどらざるにあり。
一下弟子の要は辱を忍ぶにあり。
一立身の要は退屈せざるにあり。
一勳功の要はほこらざるにあり。
一異見の要は慈悲を先とするにあり。
一安心の要は足ることを知るにあり。
一後世の要は他力に乘ずるにあり。

九二　舍利弗の本生譚

舍利弗は先生毒蛇なりしが一日國王を嚙みたり。國王その毒を受て死なんとす。醫者術をもて蛇を招

き火を燃して謂て曰く。汝國王を毒す、今毒を吸ひ取るべし。若し吸ひとることこと能はずば、この火の中に身を投ぜよと。蛇遂に火中に身を投じて死す。

今、我等長の生死の間、衆生に難義をかけたは毒をかけたのなり。今度といふ今度は淨土に參りて衆生濟度して、そのかけた毒を吸ひ取らねばならぬ。

九三 砂糖に丸めて

如何に飲みにくい藥でも砂糖に混ぜて飲めば食べられる。如何にこの世の憂き苦勞も御慈悲に混ぜて喜べば喜べるなり。

九四 鴛鴦と鹿は出家の手引

五月三日の夜、音羽の養泉寺にて「煩惱具足と信知して」の和讃を讃題として法話あり。その時「下野のありぬまに居る鴛鴦の雄鳥を、獵師が持ち歸りたるに、その夜獵師は夢に、美しき婦人來りて、我が夫を汝とりたりといふて、ことの外に恨みて

日くるればさりひしものをありぬまに
まこもかくれのひとりねぞうき

と一首の和歌を讀みて歸へりけり。明朝見れば雄鳥と足をくはへて雌鳥も死んでいたり。これを見て忽

ち髻を切りて出家しけり。唐の法常は鹿の孕めるを射て子の落ちたるを母鹿の矢を立たれながら子を舐り居るを見て出家して法華の行者となれり」といふ因縁を引きて

「これらは我が身は悪るひ恐ろしいと知りて漸くもその儘では居られず出家せられたるなり。然るに我人は、それほどじつ、として居られぬ程にもないがこれでは機の深信に契はぬかといふに、然らず、我が身は後生のことに身も心も役に立たぬと知りたるが機の深信なり。信知するとあれども我身で煩悩具足と知る

ではない。煩悩の名目を知らぬものが煩悩具足と知る筈もなし。これは善知識の悪いものぢやと示し給ふを知りて煩悩具足と知りたるなり」と述べられたりと。

九五 三経の大綱

たのむ一つで参らるゝ——大経——善もほしからず。
罪は如何程ふかくとも——観経——悪もおそれなし。
夫に違いないとの證據——小経——右の請合なり。

九六 信心の人にまぎれて

法然上人は世間の人にまぎれて念佛して浄土にむまるゝと。蓮如上人は信心の人にまぎれて地獄に落

るが悲しいこと。

九七 ふた通りの頼み

世間にたいて頼むこいふに二つあり。一つは己が望むことを適へてかゝることゝ、二つは己が望むことを適へてもらふこと。この二つを平語に言はゞ、どうかた頼み申しまするこ、さやうならばた頼み申すこの二つなり。この二つの中初めは難なり、後は易なり。

九八 念佛を主人とせよ

妄念は客の如し念佛は主人に似たり。家の内に主人だに居なば、たとひ悪しき客なりとも、みだりに不法

の事はなすまじきなり。強ひて妄念を止めんとするは悪しき客と爭ふが如し。いとわづらはし。爭はざるに如かず。世の諺にも、さはらぬ神にたゞりなしとやいふめる。されば兎角かまはぬが手にて侍るなり

この意を行仙上人の歌に

あともなき雲に爭ふ心こそ
なか〳〵月の障りなりけり

と。これ相傳の口訣なり。雲棲禪師も一佛名を念じて百千萬の雜念に換ふこいへり。全く今の意と同じ

稱佛一聲風　速拂妄念雲

正座十刧月　自浮信樂露

九九　金なくて何の己れが櫻かな

無金貧不レ賑　無金交不レ深
無金妻女恨　自令人欲レ金

一〇〇　祭まつまに

わがさとのまつりの日かず迫るらん
ふるさとつゝみの音ぞきこゆる

一〇一　焦熱地獄

こちらが欲しがりても向ふがくれぬ、そこで、こちらの胸をいりこがす。向ふが欲しがりても、こちらがや

らぬ。そこで向ふの胸を燒きこがす。

又、惜しき物を無理に取られたりしても我が心をいりこがす。錢を儲けたうても儲からぬ。そこで心をいりこがす。瞋火相燒とは腹の立つ時は互に言ひあひ、つかみ合ふて互に胸を燃し苦しめるなり。然れども世を厭ふ心なきは未覺痛なり。

一〇二　やがて淨土にて

衣をきるに就けても追付淨土の妙服と頂き、粥をすゝるに就ても追付淨土の百味の飲食と思ふべきなり

一〇三　易行の水道

大名の行列の間を人がきるとむつかしい、犬が間をきりてもやかましくはない。人は疑に喩ふるなり、犬は煩悩に喩ふるなり。

雑修自力の人は我が行に疑はなれて彌陀の他力に疑はれずにをるなり。我が足で江戸へ行くのは中途でくたびれて行けまひかの疑あり。通し籠で行くつもりなれば行けまいかの思案はいらぬなり。

一〇四　處世の要訣

鼠を鐵の金網の中へ入れて、がらり〳〵といられるなり。次第に身の皮はむけるなり。肉は次第に焦げ

るに從ふて身ははぜわれるなり。はぜわれるに從ふて身は骨を離れるなり。遂には骨と肉と別々になりて煎られねばならぬ。

口ごたへよこめでにらむ小供でも
地獄の鬼にくらぶればまし
しねくねて嫁をいじめる姑でも
地獄の鬼にくらぶればまし

つらいと思ふ人あらば、どのやうなつらいことでも上の「地獄の鬼にくらぶればまし」といふ下の句を付けて見れば苦にならぬなり。後生者のよき嗜なり。

一〇五　三經大意

念佛するばかり、信ずるばかりで助け給ふ本願なりといふことを說くが『大經』なり。何んにもいらずに佛を信ずる一念に必ず如來の助け給ふなりといふことを說くが『大經』なり。

『觀經』は、ごのやうな大罪人でも助かる、その大罪人が彌陀の本願の正客といふことを說くが『觀經』なり。

よりて『大經』『觀經』を寄せて見れば、十惡五逆の大罪人でも、行者の方には何んにも要らずに必ず助かる本願に間違ひなしといふことを說ひたが『阿彌陀經』なり。因りて雜修の人の善根なくてはと思ふは『大經』に相應せず。この樣な惡人ではと思ふては『觀經』に相應せず。すべて往生を疑ふは『阿彌陀經』に背くなり。

一〇六　人性論

人の性は大抵同じことなれども善を習へば善人となり、惡を習へば惡人となる。盜人と生れつくのではなけれども始は酒と色と博奕とが元となつて、遂に盜む心を起すなり。信を習へば淨土へ參りて樂しみが

出來る。信のなき人は犬猫と同じい食ひ飲みより外に樂しみはない。

一〇七 親は極道息子程可愛い

極道息子は親の恩を知ずして、かへりて親を恨んでをる。親の死んだ後で、自分が身上を遣ひ果しても、親がどれほど遺ふても遺れぬ位の身上にして置いてくれたならよいなどゝ反つて親を恨んでをる。そのくせ極道息子の爲めには親の心勞は、よい息子よりも多い。

自力疑心の者もその如く、阿彌陀樣の心勞は信者よ

りは多いなり。今、地獄へ落ちたるかと思召て悲しみごうしにまします。そのくせ如來の御恩を知らずに小言を言ふてをる。なんぼ、阿彌陀樣でも、このなりでは爲ゝ助けて下さるまいなどゝ如來樣を苦しめたり又信ぜずとも助けて下さつたらばよかろなどゝ小言をいふてをるのがた瓦なり。

一〇八 凡夫の心と如來の心

凡夫の心は、みな虛僞なり。可愛いと思ふもみな嘘憎ひと思ふもみな嘘。仲裁の世話して、上手にゆかぬ處が、人が世話して出來と直ぐ邪魔したい心になる。

如來は然らず。

人は世話していても向うが疑がへば世話せぬ氣になる。こちらは確かなに向ふがあやぶめば腹が立つ如來樣は然らず。

われ人は人の名を騙りてをるので實の人にてはなきなり。

一〇九 虛僞の信、眞實の信

自力で製へた信心は虛僞なり。今日は信ぜられたやうでも明日は又疑が起る。昨日思ひ出して喜ばれたが、今日は喜ばれぬ。これ虛僞の證據なり。又役に

立たぬ我が身が役に立つと思ひ、どうもなられぬ者がどうにかなられるやうに思ふもみな虛僞なり。實の信心は然らず。

一一〇 閻魔王の前にて

閻魔王の前にて誓ひし時は大王が佛法を求めて再び茲へ來るなと仰せられずとも、なんの佛法を求めずに居ましやう、再び何の茲へ來ましやうの心なり。

一一一 瓢の繪に題して

はかなきは人間一生酒一升

あるかとなればやがてなきかな

一一二　御恩報謝

六月五日、藤九に寄の席にて、「何事も報謝と存ずべきなり」といふた言葉を引きて。

「何事も報謝と存ずべきなり」とは婦の夫につかへるも、子の親につかへるも、親や夫の恩を報ゐるのちやと思ひさへすれば夫や親が無理いふても喜ばいでも腹はたゝぬ。阿彌陀樣に向ふても何の暇ありて外のことを思ひましやう。たゞ御恩報謝と存ずべなり。人の世話になりて置ひて、まだ其禮を致さぬうちに外のことは持つては行かれぬ。今阿彌陀樣の御恩を報

ぜずにいるに外のことを持つては行かれぬなり」と。

一一三　願力とは

同じき席にて、ある同行「願力とは如何なるもので御座りまする」と尋ねければ、師はこれに答へて。

「願力とは今日の我れ人を一度は淨土へ參らさずにはをかぬとある阿彌陀如來の念力ぢや。國王は憍慢を以て力とし、沙門は勘忍を以て力とし、女人の瞋恚を以て力とし、小兒は啼を以て力とす。今、阿彌陀如來は本願を以て力とし、給ふ。世界にも願力はいくらもある。この家で御座のつとまるのも、この家を最初は立

てんと願ひし先祖の願力があつたからぢや。我等が今度の極樂參りは、たゞ阿彌陀如來の本願の御力があるからぢや』と、仰せられたりと。

一一四 向ふが出來ても

諸佛の淨土へ參るは向ふがむづかしい。よりてこちらは出來ても、あちらはが出來ぬ。彌陀の淨土へ往生するのは向ふは出來てありながら、こちらが出來ぬ

一一五 信心の人にまぎれて

法然上人は「世間の人にまぎれて念佛して淨土にむまる」と、蓮如上人は「信心の人にまぎれて地獄に

落つるが悲し」と仰せられたり。

一一六 わが兒に許さゞることゝいも

一に僞。

二に氣儘。

三に許さゞる友の交り。

この三、わが兒に少しもゆるすべからず。

一一七 月を見て讀める

晴かぬるこよひの空を眺めつゝ

たのがこゝろの月かとぞみる

一一八 讀書の樂

書中有樂値千金　未爲貧困改此心

つり針をまくるこゝろはなかりけり

すぐなる道にもきたほるこも

一一九　齒が拔けた故合はぬなり

九月二十七日の初夜、今夕入洛中に得たる歌を談じて喩となして曰く。

右のうは齒左の下齒拔けのこり

かほしかめても合ぬかなしさ

衆生は助けてもらひたい、彌陀は助けたし、しかるに助けてもらうことのならぬは自力他力の左右ことな

ればなり。

一二〇　報謝の御緣

醫王の眼中には萬物みな藥なり。念佛行者の日暮はなにもかも報謝の御緣なり。

一二一　罪といふ見出しにて

罪といふ見出しにて、師は御文の中より抄出された る文あり。曰く

一　あながちに我が身の罪の深きにも心をかけずして。

一　我が身の罪のふかきことをばうちをきて。

一　在家止住のやからも一生造惡のものも我が身の罪のふかきには目をかけずして。

一　我が身の罪障のふかきによらず。

一　我が身の罪の深きことをばうちすてゝ、彌陀にまかせまひらせて、たゞ一心に彌陀如來後生助け給へと賴みまうさば。

一　さらに、その罪業の深重にこゝろをばかくべからず。

一　我が身は如何なる罪業ふかくとも、それをば佛にまかせまひらせて、唯一心に。

一三二　惡魔退散の念佛にあらず

高聲念佛、魔軍退散といふことあれど當流には一念發起の時、佛の攝護にあづかる故、魔を退散の爲めに唱ふるに及ばず、たゞ報謝の爲めと存ずべきなり。

一三三　「ありそうでないもの」と「なさそうであるもの」

ありそうでさてなきものはへそくりと
人にまことの他力信心

○

なさそうでさてあるものは借金と
家に小言と自力信心

一二四　金子拾ふ福分もなき者を

五日講の席上にて「佛法を聞く人の稀れなるを疑ふべからず佛法を聞くほどの福分のあるものは稀なり」とあるを引きて。

「昔、さる身上よしが供一人つれて道中しけるがある山路にて憩ひけるが、所持の金五百両を木の枝にかけ忘れて立ちたり。五六里へ行きてより、金子を忘れたることを想ひ出したり。その事を供の者に話せば供は顔の色を變へて狼狽いだす。されど主人は少しも驚かずいふやう。三両五両の金子ならば案じられ

るが何分にも五百両といふ大金のこと故案じることはないといふ。供は不審にたへずして其故を問ふ。主人のいふやう、五百両程の金子を、たゞしてやる程の福分の者はめつたに世界にない故氣遣ひはないと言ひて、歸りて見れば元の如く金子は無難の木の枝にかゝりてあり。今度の極樂參りは五百両や千両の仕合ではない故耳にするものは稀なり。然るに此方如き五百両は愚か、三両五両の金子を拾ふことすらならぬ福分のないものが亦信心を頂くは如何といふに、五百両、千両の金をとらしても一世限りのことにして無駄

ごとなり。今、如來は永々刼朽ちせぬ淨土參りをさせずば措くまいとの御念力よりして、この樣な者に極樂參りを得させ給ふなり。今度の淨土參りは金子を拾ふよりもまだ心易ひ手を延ばすにも出すにも及ばぬ口上一言いふにも及ばぬ。たゞさてはと信ずる計りなり」と仰せられしと。

○

一二五 火の車

親のもの子のものなりと聞くからに
　彌陀の功德はわが功德なり

○

いそぐとも浮世のことは水の泡
　急がにやならぬ後生わするな

○

一日たつた二日たつた三日たつた
　たつた〳〵とたつたいましぬ

○

たつた今たしかけてくる火の車
　彌陀たのむより逃げ道はなし

一二六 靈魂不滅

身は死するもの、くさるもの。魂は死せず、魂は檀那

の如く、身は宿にてとる人足なり。

一二七 蓮師の和歌を批難する者に

ある人蓮師の和歌のてにはの不調なるを譏りければ、師は

「荀子云藝之精者不二兩能一也」と答へられたり。

一二八 忘れ草

世の人のよく忘るゝものは第一に我が身。第二に色好み。第三に忠孝の道。第四に病。第五に貧しかりし時の事。第六に嬉しかりし時のこと。第七に物の物に從はざる時のこと。第八によろづのなさけ。

第九に後生の道。第十に年のよりたること。

一二九 人の爲めを思ひてなせる行爲は

朱雀帝の時、夜毎に妖星あらはれたり。博士曰く、これ大臣家にたゞりありと。時の右大臣小野宮實頼は祈禱せり。然るに左大臣枇杷の仲平は祈禱せず。これが爲めに出入の法師はこれを仲平に問へば、仲平曰く。實頼は年少く才あり、朝家の爲めになる、われは才なく且つ年老ひたり。われ祈りて祟りを受けずば實頼に祟りあり。故に朝家のために祟りを受くべしといへり。法師これを聞きて、これ何よりの祈禱なりと

而して遂に崇りなかりしと。

世の中は皆、てまへかつてをすれば、かへつて不勝手となり、勝手をせねば、かへつて勝手となるものなり。

一三〇 人の一生

人、八十年僅かに二萬八千八百餘日。そのうち初二十年ばかりは、わきまへなし。後二十年は弱はりぬ。中四十年の中、半分は眠むる。殘り二十年。そのうち自他の世話事、又は自他の苦患に身心を勞す。心にかなひ樂しむ時は一向僅かなり。されば高辨上人も「玉葉集」に

いとけなし老てよはりぬさかりには
まぎらはしくてつひにくらしつ

と言へり。

一三一 往還廻向は往復切符

ある人往還廻向の理由を尋ねければ、師は「往還廻向にあづからねば往生はならぬ。京へ行くにも、往きばかりの路用では行かれぬ。もどる路用もなければならぬ」と仰せられたりと。

一三二 無碍の一道

無間の業をつくれば外に布施忍辱等の善行ありと

も無間地獄に落つるなり。本願を信ずれば外に、いかなる惡ありとも淨土に參るなり。

一三三 汝に出ずるものは汝に返る

李申、豪福なり。ある日二人の僧來りて布施を求む李申二人の僧を憎んで、毒を入れたる餅を食はしむ。僧これを知りて食ふ傚して秘かに持ちかへる。翌日李申の子、寺に遊んで、その餅あるを見て、取りて食ふ。家に歸るや俄かに腹痛を覺へて死しけりと。

誠に「出於汝者返於汝者也」と言はこれにて知るべし。

一三四 終身天命の原因五つ

終身天命に五つあり。

一には財を求むるに苦をやむで病を生じて死す。二には財を求むる爲めに苦しむで、くびれて死す。三には盜をなして殺さる。四には求財の爲めに惡事を謀み、それが顯はれて入牢し首を切らる。五には財寶を貯はへて盜人に殺されて死す。

一三五 如何に地獄へ落んと思ふとも

なんぼ牢屋へ入つて見て話の種をこしらへたいと思ふても罪なくては入られぬ。如何に極樂へ參りた

いと願ふても信なくては參られぬ。又願生の心うすくとも信心さへ頂けてあれば參られる。

若し罪があれば落ちたいと望まひでも落るなり。

一三六 名利の挿箱、講釋法話の兩がけ

師、ある時、愛知川寶滿寺へ午前講釋、午後は法話の約束にて出張せられし時、左の狂歌を詠まれたりと。

ゆきもどり心に名利挿箱

講釋法話兩がけにして

一三七 放鼠吟

ある夜、一兒童本堂の東廂にて大きさ鼬の如き老鼠

を捕へ、その夜は箱に入れて麻索もて、これを縛り置さ翌日所化に命じて附近の野に放たしむ。時に師は五言を賦して曰く。

汝有害于家　恰如國有賊　詩人賦碩鼠
憎汝且歎息　有體安不饑　有口安不食
是故不敢責　掠我伴蒲塞　在魯喰祭牛
一何其貪冒　僧室嚙經卷　農家妨蚕織
斯僣尤可憎　宜爲鬼爲蜮　乘暗宵横行
惡明晝伏匿　梁上學君子　厨下聲唧々
今時邪見僧　談空一淑慝　汝亦惡平等

聲々徒説卽　汝何其肥大　猷猫有餘力」
知是盜人禾　既食三百億　天綱維恢々
今宵爲童得」　兒童何其能　是汝罪之極
重裂或腰斬　曷怨其深刻」　極刑若不用
人作不平色」　我宗崇慈悲」　犯殺傷其德」
若也赦不刑　宋襄仁乃感　抱斯摸稜手」
中心一愍惻」　附餌放遠郊」　擬彼投冀北」

一三八　地獄、餓鬼、畜生

はらたつるは地獄、慾の起るは餓鬼、愚痴の起るは畜生。互に嫁は姑が氣にいらぬといふて腹をたて、姑は

嫁が氣にいらぬといふて腹たてる。互に地獄の有樣なり。

物賣りに來ると賣る者は一文でも、よけ利益を獲んと思ひ、買ふ者は一文でも安く買はんと思ふ。互に餓鬼の有樣なり。互に理由の解らぬことをいふて爭ふてをるは畜生の有樣なり。とかく人の善惡をいはずよい人のことを言へば、讃めることはなくして唯謗ることを多きは人に善きこと少くして惡事が多き故なり

一三九　佛猶二大盜一

九月十二日

昨夜譬喩説佛まるたすけ曰。有人藏金於匣。或鑰之或縛之以思盜不能取。乃小盜有鑰故不能取。縛故不能奪。然有大盜負匣去。則鑰縛奈之何。今衆生有煩惱鑰故恐佛不能攝。有惡業縛故恐佛不能極。然佛猶大盜攝凡夫愚人惑業全體。何患惑業。

さだめなき命ときけばあすの夜の
月もこよひにこめてみなまし

時街鼓三更

一四〇 「あさからぬ」の五字

了英師、ある時師に、ある人出家せんと欲したるに親

戚の者共これを止めたるに此人肯かずして一首の和歌を詠じたり。即ち

あさからぬ人のこゝろにそむかめや
大方に世をいとう身ならば

と。然るにこれを了英の友在樹は許して「あさからぬ」の五字冗なりといへりと談る。

老師これを聞きて、これ決して冗にあらず。この五字勇猛の發心にあらずば背くべからざるを顯はすが故なりと仰せられたり。

何事も報謝と存ずべきなり。婦の夫に仕ふるも子の親に仕ふるも、親や夫の恩を報ずるのなりと思へば夫や親が喜ばずとも腹はたゝぬなり。阿彌陀樣に向うて、なにの暇ありてか外のことを思ふぞ。たゞ御恩報謝と存ずべきなり。

一四二 紀の國屋亦右衞門の辭世

伏明師の隨筆に曰く。

京大融寺圓智坊は、初め浪華の人にして紀の國屋亦右衞門といふ、本家何某につかへて正直なりし人なり主人それに百兩の資本を與ふ。百兩を三千兩に、三千

兩を萬兩に、萬兩を十萬兩にして、それを元の主人にもづり與へて大融寺に出家して辭世に左の歌を讀まれける。

たちてもく奈落の底をのぞきみん
いかほど欲のふかき穴ぞと。

一四三 聽聞の仕方

江州の武左衞門ある時、伏明老師に尋ねて「既に本願他力の趣聽聞仕候上は自身の聽聞に引きあてゝきく心持に候。いかゞに候や」と。

老師答へて曰く。それは高慢にまぎれて惡し。た

〻我身はなにも知らぬものなりと思ひて御聞かせありがたしと心得て聞くべし。今其許の申さるゝは我己に心得顔の分際なり。道宗は「いつも聽聞申すがはじめたるやうにありがたい」と申されたり。我よく是迄に聽聞して居るの慢心を差置き、たゞ御聞せありがたやといふ心になりて聽聞すべし。蓮如上人の「御助けありつることのうれしさよと喜べば、自力にまぎれてわろし。御助けあらうずることのありがたさよと喜べよ」と仰せらるゝが如し。一念の時御助けは明なれども喜ぶもの〻心得は御助けあらうず

ことの嬉しさよと喜ぶなり。今迄に安心の趣聽聞したれども、その上に聞せ下さるゝありがたさといふ心得にて聽聞すべしと。

一四四 虫の聲

ならはゝやながき夜すがらたへまなく
彌陀のむかへをまつむしのこゑ

○

世の中もかくこそしれをなじ夜を
をのがさまゞ〻鳴く虫の聲

一四五 夜開戸雪白

しろたへの色やはかくる梅よりも
雪にぞやみはあやなかりける

○

いまの世の人はいかゞと夜もすがら
まなびのまどにつもるしらゆき

一四六 異見する時と、せらるゝ時と

喫拳何似打拳時といふ言葉あり。異見する時は人を我れに從へかしと思へども、異見せらるゝ時は人に從ひにくきものなり。

一四七 心を紙袋に入れよ

かくの如き世には眞なければ口を足につけ、耳を腹につけて、心を紙袋に入れて經藏に入れをくべきなり

一四八 御名は我等が往生の證據なり

源頼實が住吉明神へ命にかへて「名歌詠ませ給へ」と願ひしに、その仰なし。その後、西の宮にと泊まりし夜、はら〳〵と音すれば雨ならんと出て見れば雨にあらずして木の葉なり。又、はら〳〵と音する故、木の葉ならんと出で見れば雨なり。そこで

木の葉なる宿はきゝわく方もなし
みぞれする夜もしぐれせぬ夜も

と詠みたり。その後、住吉へ參りて、「何卒名歌を詠ませ給へ」と祈りしに、明神のお告に、「その方に先達て名歌を與へたが、知らぬか」と仰せらる。そこで賴實

「その覺はござりませぬ」といふ。明神仰せらるゝには、「覺へないとは言はさぬ、先達て西の宮にて詠んだ名歌はこの方より與へた名歌ぢやぞよ」と仰せられたりとある。

今、た互は賴んだは賴んだけれども、私が參られるは證據がないで如何なものであらう、なんぞ阿彌陀樣が證據を見せて下されたらば、よからうにと思ふて、どう

ぞ證據を下されと阿彌陀樣に言へば、阿彌陀樣は、その證據は遠うに與へて置くぞよ、その證據こそ汝が口に稱へる南無阿彌陀佛の御名ぢやぞよと仰せらるゝなり。この故に法然上人は異香をかぐよりも紫の雲を見るよりも確かな證據とは口に稱へる南無阿彌陀佛なりと仰せられたり。

一四九 我等は路に落ちたる金を拾ひ得ぬ者なり

『大經』に「然世人薄俗、爭不急事」とある薄俗とは薄福の風俗といふことにて、福分の薄ひといふことば路に金子が落てありても、ゑゝ拾はぬが薄俗なり。

佛法を朝夕きゝながら、極樂參りの信心を獲るこゝろのないは路に落ちたる金をゑゝ拾はぬと同じことなり。迦才の「淨土論」には靜夜結迦趺坐して思ふて見よ、一には身の危脆如泡念々不停、二には火宅不安穩の處に居れば驚かずには居られぬ、三には此身は何の位地にゐて身口意の三業を造りて地獄に落ることを念ふべしとあり。よく〳〵思ふべきことなり。

一五〇 何事も報謝と存ずべきなり

「なにごとも報謝と存ずべきなり」とは婦の夫につかへるも、子の親につかへるも親や夫の恩を報ずるのぢやと思ひさへすれば、夫や親が無理を言ふても喜ばひでも腹はたゝぬものなり。

阿彌陀さまに向つて何のいとまありて外のことを思ひましやう、唯御恩報謝と存ずべきなり。人の世話になりてをひて、まだその禮を致さぬうちに外のことは持つては行かれぬ。今阿彌陀さまの御恩を報ぜずにいるに外のことは持つては行かれぬ。よりて親の年忌を勤めても、たゞ佛恩報謝と存ずべきなり。

一五一 慰細君

糟糠慙謝下堂妻　偏坐吾不レ好突梯

聖主難期來渭上　不如實地手相携

一五二　他力念佛は上白米なり

米は籾も取らず糠も離さずに食ふては、うまくない今、念佛も萬行隨一の念佛は自力の籾をこらねばならぬなり、善本德本の念佛は籾はとれども糠は離れぬ。淨土眞宗の行者の、こゝやかうこわが機を當て力にして居るのは自力の糠を離れたやうでも、やはり糠がすつぱりこゝれず。上白米にならずにあるなり。それらは他力念佛の上白米のうまみはなきなり。

一五三　虛假不實の我が身

自力でこしらへた信心は虛僞なり。今日は信ぜられた樣でも明日は又疑が起る。昨日思ひ出しては喜ばれたが、今日は喜ばれぬ。これ虛僞なり。又役に立たぬ我身が役に立つと思ひ、どうもなられぬものがなられるやうに思ふはみな虛僞なり。今、實の信心は然らず。

一五四　「南無」とは衆生の阿彌陀佛を一心一向にたのみたてまつるこゝろなり

他宗にて名號を稱へるといふことは、みなその佛菩薩をたのむことなり。そのうち外の名號には南無と

頼めども、その名號に助け給ふいはれはあらず。今六字は阿彌陀佛に助け給ふいはれあらはる。然れば、こちらから、もちかけてたのむのではない、たすけ給ふことに疑ひはれて南無とたのむなり。

一五五 望庭老櫻花飛

さらでだにちるをしみればかなしきを
老木さくらの花のゆふかぜ

一五六 萬行圓備の嘉號

報謝の稱名は心盡しなり。老萊子が親の前にて子供のまねをしたるも心盡しなり。

如來の功德を圓滿して增減なきが如來なり。この方で念佛申したとて、それで如來の功德が增へるのではなきなり。

一五七 老牛呰犢の愛心

ある經に愛如險深河欲如漏舡とあり。父母妻子兄弟などのある世界の迷に沈み易きことは、險しき深ひ河の如し、この世界を離れるには愛欲を絶ねばならぬ。一念でも可愛い不びんの愛欲があれば漏れる船の如く海を渡ることはならぬ。かへりて沈むなり。今、我れ人は老牛呰犢の愛心なり。なんぞ能く生死を

離れんや。御座に居ながらも留主の内に孫が貧傷せねばよいがと思ひ出し、家へ歸るや否や、た佛壇に御禮することをも忘れて、孫は何所にいるぞと尋ねるは實にこれ老牛咀犢の愛心なり。

一五八 松影の暗きは月の光かな
すはの海や衣が崎にきて見れば
富士のうへこぐあまのつりふね

この歌は弘法大師の歌にも、若櫻の宮の歌にもいふ「木曾名所」に出でたり。

今、た慈悲の上から喜んで暮すのは御慈悲の影たる

信心が胸のうちへ寫りて下されたからなり。

一五九 恩愛はなはだ絶ち難し
中納言顯基、出家の後修行まめやかなれども、わが子を思ふて忘れず。
貪愛は出離の妨、瞋より罪重く、瞋恚は功德を滅し、貪より罪重さなり。

一六〇 念佛には獨り立ちをさせよ
「雖レ作二行業一常與名利相應」といふことあり。行業とは淨土參りの勤めのことなり。雜修の人は己が凡夫自力の行業もへに、よく常與名利相應するなり。相應

とは中よくつれ立つことなり。凡夫自力の行なるが故に名利の凡夫心と中よくつれ立つなり。行業も名利も凡夫仲間なればなり。行業の勤するに就ては名聞へがしに思ひ、これを利用にもしたき心が中よくつれ立つて起るなり。たといその名利の心をなくしてみても、又、わが罪を消して浄土参りの用に立つと思ふ故に直に又名聞こへがし等の心になるなり。

他力の信者は浄土参りするは己が行業にあらず、如來の行業に助けられるなりと信ずる故に、これ程務めても凡夫自力の行業にあらず、如來廻向の行業をと心

得る故に、これ凡夫自力の行業にあらず、如來他力の清浄眞實の行業なる故に、我がよい氣になりて名聞に思ふ筈はない。又、たとひ凡夫のこと故、名利の心は起らうとも修める行業は他力廻向の如來眞實の行なり。名利の心は凡夫の迷心なり。よりて他力の行業と名利の心とは大に相違する故に、たとひ一時に起りても土台が違ふ故に相應することはいはれぬなり。

よりて名利の心の起るに就ては土臺しかたがない我が機といふことが思ひ知られて、あやまりはてるなり。つれ立つて起りても仲のよいことはない。より

て相應とはいはぬ。たとへば雜修の人の行業に就て名利心の起りたるは賭博打と賭博打とつれ立つ如し專修他力の人の名利の心の起るは學者と賭博打とつれ立つが如し。

雜修の人は我が念佛と思ひ我が勤めたが役に立つと思ふ故に名利と相應す。專修の人は念佛も我が念佛にあらず、如來の念佛を申さして貰らうのぢやと思ふ故によい氣になりて名利と相應することばなきなり。

一六一　二河白道の圖賛

ある時、專明榮公、果物を持ち來りて師を訪ぬ。師藥果を供して談暮前に抵る。榮公曰く。近日二河白道の圖賛を作れり。卽ち

中間開白道　水火數交侵
水火妙譬喩　能安怖畏心

聲なくはいかにもかまし水と火に
かくれてわづかみゆる道をば

師は榮公の爲めに香月院師の同じく二河白道の賛を示さる。卽ち

去死留死　一無不死

東西遺喚　可仰可信

又、同じく香樹院師の賛をも示さる。即ち

水波口濕去　火焔又燒來

遺喚東西嚮　能令白道開

一六二　彌陀の本願は像末五濁の世になる理由

聖道の教は自力なる故に正像末の三時の機にかゝはりて像季、末法には衰ろへるなり。彌陀の本願は他力もへに機にかゝはらぬもへ三時に通じて、ひろまるなり。

一六三　裸體を羨むべからず

聖道門の人は眞宗の教をきらひて或は疑ひ或はそしる。法然上人は自力根性の他をしらせ給はぬがあはれに候との給ふ。又、眞宗のたろかな人は聖道の宗旨の行人を見ては却て吾が宗を疑ひわが身の往生をあやふむ。

例へば船に乘る人より川をかち渡りする人を見る如く、衣を拔ぎ裸體になるを羨むべきにあらず、又自分の衣を着て居るに就て渡られまひかと疑を起すべきにあらず、今は生死の大河を彌陀の願船に乘じて渡るなり。

一六四　「御一代聞書」懈怠章

師「御一代聞書」懈怠章につきて

「この一章は蓮如上人が、假りに賓主を設けて教示したまふ一段にして、若し斯の如きの機ならば、かくの如く教ふべしとの思召ならんか」と申されたりと。

一六五　凡夫の嗜みは間にあはぬ

師の仰せに

「八地以上の菩薩は任運無功用に念々に功德倍增するのに、また一大阿僧祇劫かゝらねば佛にはなられぬそれほどの佛になるのに、今日の凡夫の嗜なんだの慎

しんだの位が往生の間にあふ筈がない」と。

一六六　機の深信で味をつけよ

師、隨筆の中に曰く

「熊掌豹胎は食中の美なるものなり、生呑活剝は則ち一蔬一笋に如かず」といふ隨園の語を引き、法の深信も機の深信で味をつけねばならぬぞと言へり。

一六七　狼に逐はれて

同じく隨筆に曰く

「窮猿林に投ず、豈に木を擇ぶに暇あらんや」、といふ語あり。猿が狼に逐はれて、飛び立つて上りさへすれ

ば難をのがれる。今生死の曠野にさまよひて出る息は入る息を待たぬ虎や狼に遂ひ詰められている身は本願の林に逃げ込み南無阿彌陀佛の大木目がけて上りつく外はなきなり。

一六八 信の弊は邪見

又曰く

「信の弊は邪見なり、邪見の業は墮獄、行の弊は自力、自力の善は三惡道を免がる。要眞二門の攝論なり」と

一六九 元日法語

ことに目出度きは信決定の身の上、攝取光明の時に

極樂の近く春を迎へ、名號至德の風、靜かに三途惡趣の厄をはらひ、無量壽の命をことぶく。

天子、將軍は目に見へた富貴、ならべた十両の金子、われらは封金の千両、みにそへぬ榮華なり。

一七〇 新年法話

寒中も今明日なれば、やがて新春になれば人々の心も春らしくなりて、みな祝ふことなれば念佛行者も祝ひすべきなり。それに就て「沙石集」に丹波國の普用寺の上人のことが出でたり。これは手紙にこしらへた阿彌陀如來の口上とは思ふべからず。正覺大音